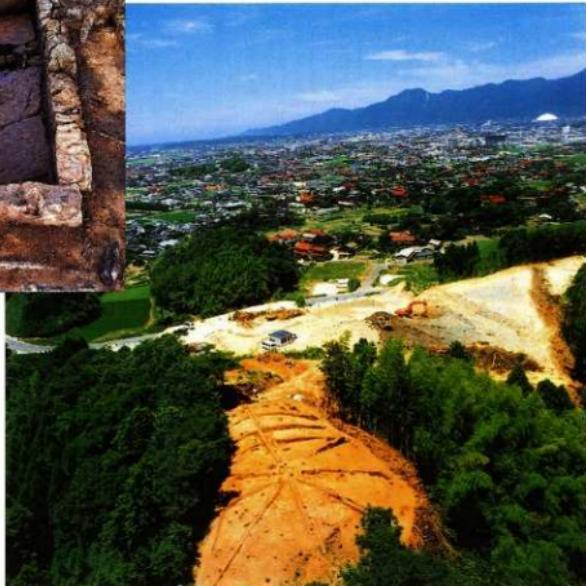


一畠バス営業所用地造成事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 池田古墳

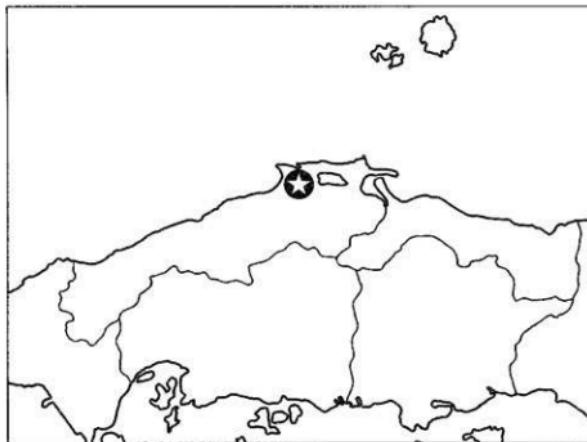


2001年7月

出雲市教育委員会

一畑バス営業所用地造成事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 池田古墳



2001年7月

出雲市教育委員会



池田古墳出土遺物セット



池田古墳主体部

## 序

このたび、一畠バス営業所用地造成事業に伴う池田古墳の発掘調査を実施いたしました。

今回調査をした古墳は、事前の試掘調査により新たに発見されたものであります。また調査の結果より、付近ではほとんど発見されていない古墳時代中期の箱式石棺を伴う方墳であろうことが判明いたしました。

出土遺物も副葬品である小型仿製鏡の小破片3点、ガラス玉と凝灰岩製の白玉が約150点、鉄剣1点、鉄斧1点、鉄製U字状鍬(鏂)先1点など、後世の盗掘を受けているにもかかわらず、古墳の性格を表しているような遺物が出土しました。

以上、出雲地域において調査例の少ない中期古墳に新たな資料を提供することができました。古墳研究資料として、また郷土の歴史復元の資料としてご活用いただければ幸いです。

発掘調査及び本書を発刊するにあたり、御協力を賜りました一畠工業株式会社をはじめ関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成13年（2001）7月

出雲市教育委員会

教育長 多久 博

## 例　　言

1. 本書は、一畑工業株式会社の依頼を受けて、出雲市教育委員会が、平成12年度に実施した一畑バス営業所用地造成事業に伴う池田古墳発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は、池田古墳である。

3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

出雲市上塙治町3179番地外

4. 発掘調査は、平成12年4月17日から8月1日までの、4ヶ月間にわたり実施した。

5. 調査組織は、次のとおりである。

調査主体　出雲市教育委員会

事務局　平成12年度　大田　茂（文化振興課　課長）・川上　稔（同　課長補佐）

平成13年度　板倉　優（芸術文化振興課　課長）・川上　稔（同　文化財室長）

調査員　米田美江子（平成12年度文化振興課・平成13年度芸術文化振興課　嘱託員）

調査補助員　佐藤二鈴・勝部真紀・石橋弥生・佐々木紀明・今岡ひとみ（平成12年度文化振興課　臨時職員）

調査指導　渡邊貞幸（島根大学教授）、池淵俊一（島根県教育委員会 文化財課）

6. 発掘調査及び整理作業、添写については、以下の方々のご協力を得た。

発掘調査　渡部政義・安食　勉・長島節子・占川八郎・小室和子・土肥源市・吉川幸男・今岡勝美・奥田広信・米山清司・周藤俊也・鎌田　悟・岸　邦夫・藤原一男・米原信夫・福田益之・畠　守隆・大森長一郎・板垣将信・公田悦郎

整理作業　矢田愛子・石川桂子・鶴口令子

7. 調査及び報告書作成に当たっては、前記した方々の他以下の方々から有益なご助言・ご指導をいただいた。記して感謝いたします。（敬称略）

青銅製品緊急保存・鉄器X線撮影：間野大丞・澤田正明（島根県立埋蔵文化財調査センター）

石材鑑定：中村唯史（島根県立三瓶自然館）　林　健亮（島根県立埋蔵文化財調査センター）

8. 本書で使用した方位は、磁北を示す。

9. 遺構・遺物の省略記号は、次のとおりである。

S X : 土壙

I : 鉄器

B : 青銅製品

10. 遺物番号の左側は挿図番号、右側は同図内の番号を示す。

11. 遺物の実測・写真撮影、及び本書の執筆・編集は米田が行った。

12. 出上遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

# 目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

写真図版目次

## 第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	1

第2章 位置と環境 .....	4
-----------------	---

第3章 池田古墳の調査 .....	8
-------------------	---

第4章 まとめ .....	24
---------------	----

遺物観察表 .....	28
-------------	----

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

- 第1図 池田古墳調査地周辺詳細図  
第2図 池田古墳と周辺の主要遺跡  
第3図 調査前地形測量図  
第4図 調査後地形測量図  
第5図 調査区内割り及び土層断面配置図  
第6図 土層断面図  
第7図 遺構外遺物出土状況図  
第8図 7区出土石棺石及び鉄斧拡大図  
第9図 周溝及び遺構外出土遺物実測図  
第10図 J-J'土層断面図  
第11図 SX01実測図  
第12図 SX01石棺実測図  
第13図 SX01石棺内遺物出土状況図  
第14図 SX01石棺内出土ガラス玉実測図  
第15図 SX01石棺内出土白玉実測図  
第16図 SX01石棺内出土鉄器及び青銅器実測図  
第17図 SX02実測図  
第18図 出雲平野中期古墳分布図

第1表 出雲平野中期古墳一覧表

## 写真図版目次

- 表紙 箱式石棺  
池田古墳上空より北西を望む  
巻頭 池田古墳出土遺物セット  
池田古墳主体部  
図版1 主体部（上空より）  
石棺及びトレンチ調査完了状況（上空より）  
完掘状況（上空より）  
図版2 SX02検出状況  
SX01検出状況  
SX01D-D'土層断面（D'側）  
図版3 SX01D-D'土層断面（D'側）  
SX01D-D'土層断面（D側）  
SX01A-A'土層断面（A'側）

- 図版4 SX01A-A'土層断面（A側）  
SX01遺物出土状況1  
SX01遺物出土状況2  
図版5 SX01遺物出土状況3  
SX01遺物出土状況4  
SX01遺物出土状況5  
図版6 池田古墳上空より南西を望む  
池田古墳より大井谷を望む  
大井谷より池田古墳丘陵を望む  
図版7 池田古墳上空より南東を望む  
北上空より池田古墳を望む  
南上空より池田古墳を望む  
図版8 完掘状況（周溝付近より墳丘を見上げる）  
完掘状況（北より墳丘を見上げる）  
主体部（上空より）  
図版9 主体部（南東より）  
SX01半裁状況  
南東小口石（ノミ痕）  
図版10 南西側石東側（ノミ痕）  
南西側石中央（ノミ痕）  
南西側石西側（ノミ痕）  
図版11 北西小口石（ノミ痕）  
北東側石西側（ノミ痕）  
北東側石中央（欠損部分）  
図版12 北東側石東側（欠損部分・ノミ痕）  
箱式石棺完掘状況1  
箱式石棺完掘状況2  
図版13 箱式石棺埋葬復元状況  
SX01完掘状況  
SX01・SX02完掘状況  
図版14 7区内石棺石及び鉄斧出土状況（上方より）  
7区内石棺石及び鉄斧出土状況（立位より）  
7区内鉄斧出土状況拡大  
図版15 石棺内出土ガラス玉  
石棺内出土白玉  
7区内出土鉄斧  
小型仿製鏡  
石棺内出土鉄器  
遺構外出土鉄器

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成10（1998）年11月2日、一畑工業株式会社より、一畑バス営業所用地造成事業予定地内における埋蔵文化財の有無についての照会を受けた。予定地内は、上塙治横穴墓群の範囲内であるため、試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、同年12月1・2日にA～C地点（7ヶ所のトレンチ：第1～7トレンチ）を、翌平成11年2月23日～3月5日にG地点（6ヶ所のトレンチ）を、同年7月19日～30日にH地点（5ヶ所のトレンチ）を行った（第1図）。

試掘調査の結果、A・B・H地点とC地点の第6トレンチからは遺構・遺物とも確認できなかったが、C地点の第7トレンチより箱式石棺を1基確認した。G地点からは2点の須恵器が出土したが、遺構は確認できなかった。

この結果を踏まえ、一畑工業株式会社と出雲市教育委員会で協議をし、平成12年4月よりC地点範囲内の発掘調査を実施することで合意した。

### 第2節 調査の経過

調査は4月17日より開始した。事前に伐開は終了しているので、細木などの伐採・除草及び腐植土除去を全体に行つた。

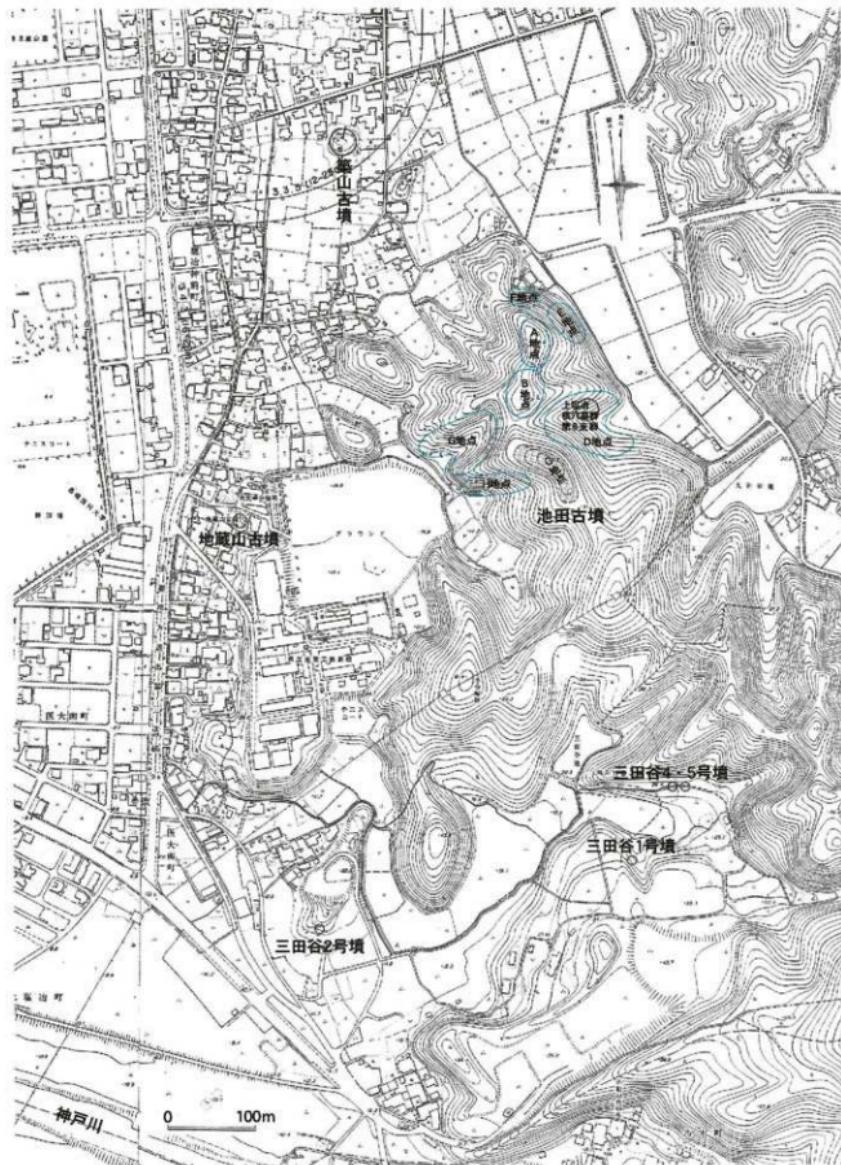
一方、杭の設定を行うこととし、基準となる杭1を頂部に設定した。調査区中央を通る長軸として杭1から7m東南に杭2、13m西北に杭3、杭3から7m西北に杭7を設定し、長軸に対する短軸として杭1と直角で7m北東に杭4、6m南西に杭5、杭2と直角で8m南西に杭8、杭3と直角で6m北東に杭6を設定した（第5図）。

杭を設定し終えると、調査前測量を調査区内全体に行う。ほぼ西側に現在の獣道が墳端を南東から北西方向に削っており、また東側・北側も墳端が崩壊し、崖状となっていることを確認する。

次にトレンチ調査のために杭1～8を利用して新たな杭を設定した（第5図）。杭1から杭5方向1mに杭0を設定し、先に設定した長軸杭2・3・7から1m南西直角に杭9・11・12（長軸に平行）を、また杭0から杭11の線上で杭0から6m位置に杭10を、杭3・6から東南3.5mに杭16・17を設定した。また放射軸として、杭0から杭8（距離10m）を通るラインを利用し延長線上杭0から13.2mに杭13を、このラインから90°振った2方向にそれぞれ杭0から8mに杭14、5mに杭15を設定した。

トレンチは先の軸を利用して、第5・6図A-A'～I-I'上層断面ラインに沿って幅約50cmのものを入れた。

また杭0を軸としたラインを利用して、調査区を14区に区画した（第5図）。杭0を頂点に杭13と杭10の延長線と杭16・17で開いた範囲を1区とし、同様に時計回りに2区～14区と命名した。



第1図 池田古墳調査地周辺詳細図 ( $S=1/5000$ )

調査区範囲内自然地形（第3図）は、一見して前方後円墳様を呈しているため、トレンチ調査では土層を確認しながら墳端等をチェックしていった。前方後円墳であるならば、8・9・1・14区内にてくびれ状の地形を呈するはずであるが、くびれ的な変化点を確認することはできなかった。しかし同区内に幅約3.5mの溝状遺構を検出することができた。この溝状遺構は、埋葬施設の存在する丘陵を区画するように配置されており、ここで、前方後円墳の可能性は消えた。前方部と考えていた平坦部からは、遺構は全く検出されず、若干の遺物が出上したのみである。

盛土がほとんど流出して地山からの堆積物が少ないので確認した後、全面掘削を開始した。それと共に、当該調査区内の最高位に所在する主体部の調査に取り掛かった。当初より露出のため確認していた箱式石棺に平行した土壙が1基検出された。箱式石棺は盜掘を受け、北東側は破壊されていた。しかしながら小遺物は盜掘を免れ、玉約150点、鉄製品・小型仿製鏡の小破片数点が残存していた。また7区からは箱式石棺の蓋石と考えられる石が同レベルで集中して出土し、石棺と同時期と考えられる鉄斧が1点付近から出土した。盜掘時の残骸と考えられる。

全面掘削の終了した箇所から、調査終了後測量を行う。最終的には、崩壊した部分が多く歪な地形ではあるが、辺をもち凸溝も辺をもつようなので、方墳であろうと判断した。

#### 池田古墳の命名

当該調査区は地番調査の結果、丘陵の頂部を境界として、東側が大井谷、西側が池田と真っ二つに分かれていた。しかし、大井谷古墳が既に谷を挟んだ支丘陵裾上に所在していることと、当古墳は丘陵頂部に位置することより谷と付く名は不似合いなため、池田古墳と命名した。

## 第2章 位置と環境

池田古墳は、出雲市中心域から南へ約1.5km、神戸川が山間部から平野部に流れ出た右岸に位置する丘陵が平野部へと延び出す尾根先端の頂部に所在する。

出雲平野は、斐伊川とこの神戸川による沖積作用によって形成された平野である。約6～5千年前頃の縄文時代から徐々に沖積作用が働き、それによって形成された自然堤防、その後背湿地となる沼沢地がいたる所に広がった景観は、風土記の時代までも続いているようである。

縄文時代から弥生時代にかけて急激な沖積作用により、早くから自然堤防の発達していた矢野遺跡では、平野中央部では希である縄文時代後・晚期から集落が形成され、古墳時代初頭まで連綿として遺跡が続いている。そこから南に位置する蔵小路西遺跡では縄文時代晚期の生活跡が見つかっている。そのまた南に位置する善行寺遺跡からは旧河道らしき跡から縄文時代晚期の遺物が出土している。また海岸砂丘上に立地している上長浜貝塚からは縄文時代早中期の遺物が出土しており、丘陵部に位置する三田谷I遺跡からも縄文時代後・晚期の遺物が出土している。また三田谷I遺跡では平成9年度調査で、縄文時代後期の丸木舟が埋没湖沼から検出されている。

弥生時代前期の様相は今ひとつ不明であり、矢野遺跡・三田谷I遺跡といった縄文時代から続く遺跡から、また神戸川左岸に立地する古志本郷遺跡<sup>21</sup>・田畠遺跡・浅柄遺跡、斐伊川左岸に立地する中野美保遺跡・中野西遺跡<sup>22</sup>などから若干の遺物を確認しているに過ぎない。

出雲平野に遺跡が急増するのは弥生時代中期中葉からである。自然堤防上に立地する白枝荒神遺跡・天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡・田畠遺跡・知井宍多聞院遺跡などは、ほぼ同時期から集落を営んでいる。中でも、天神・古志本郷・下古志・田畠遺跡では多重環濠集落の様相を見せ、出雲平野における集落の在りように一石を投じている。また斐伊川左岸標高40mの丘陵地で発見された長廻遺跡は低地に多くの集落が営なまれている時に、問題提起をする遺跡として存在する。また後背湿地に立地する藤ヶ森南遺跡ではほぼ同時期の水出跡を検出している。

弥生時代後期中葉、西谷丘陵に築かれた四隅突出型墳丘墓は、この出雲平野に巨大な権力者の存在を、また権力者を中心とした集落が発展してきたであろうことを想像させる。

これらの遺跡に遡れて集落を築くのは、山持川川岸遺跡・姫原西遺跡などである。しかし前記した集落も後記した集落も、一部を除き古墳時代初頭にはほぼ姿を消してしまう。

これ以後の出雲平野は前期末に大寺古墳・山地古墳、中期に北光寺古墳・西谷15・16号墓など、築かれた古墳は数少ない。このように一時衰退したかのように見えた出雲平野も、後期になると今市大念寺古墳・妙蓮寺山古墳・上塙治築山古墳などの大型古墳を含む多数の古墳・横穴墓が築かれるようになる。

この時期の集落としては古墳時代前期に入ると、先に姿を消した集落とは立地を異にして新たな集落が築かれる。矢野遺跡の西に位置する井原遺跡<sup>23</sup>、斐伊川左岸に立地する中野西遺跡など新たに発見された遺跡である。中期には、三田谷I遺跡の丘陵部分、出雲平野西部の浅柄遺跡で集落が営まれる。

律令期の出雲平野は、天平5（733）年に作成された『出雲風土記』に記載されているように、鳥上山より流れ西流して神門水海に入る「出雲大川」即ち斐伊川と、琴引山より流れ神門水海に入る神戸川に挟まれた肥沃な土地に恵まれる。神門水海は現在の高松・長浜地区周辺を覆う地域を占し、「齒の松山」とよばれた「圓の長浜」によって潟湖を形成していた。弥生時代中期に集落が急激に増加したのは、このような肥沃な土地が現れたためでもあろう。低湿地である高岡遺跡・藤ヶ森南遺跡からは、水田跡が検出されている。

出雲平野は『出雲風土記』によると、出雲郡と神門郡にあたる。神門郡に比定されているものには、墨書き土器・縁釉陶器・大型の掘立柱建物跡などを検出した天神遺跡、墨書き土器・縁釉陶器・円面鏡・腰帶の金具・大型建物跡群などを検出した古志本郷遺跡などがある。また神門郡新造院の比定地である神門寺境内廃寺・八野郷の比定地である矢野遺跡などもある。

中世には、鳴ヶ城跡・大廻城（向山城跡）・大井谷城・半分城などが築城されたほか、平野部では、矢野遺跡・蔵小路西遺跡・渡橋沖遺跡・下古志遺跡などで館跡が検出され当時の状況が明らかとなりつつある。また平野部から谷奥深い大井谷Ⅱ遺跡では寺院関連の遺跡ではないかと考えられる遺構・遺物が検出されている。

注1 島根県教育委員会で調査中のG区検出溝状遺構から、平成11年12月指導会中に出土したのを行っていた筆者も実見した。

注2 両遺跡とも平成12年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

注3 平成12・13年度出雲市教育委員会により発掘調査を行った。

## 参考文献

### 出雲市教育委員会編

『出雲市遺跡地図』1993

『遺跡が語る古代の出雲—出雲平野の遺跡を中心として—』1997

西尾克己・大國晴雄「出雲平野の古墳」「出雲市民文庫9」1991

『出雲市天神遺跡』1972

川上 稔『古志地区遺跡分布調査報告書』1988

川上 稔『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989

川上 稔・湯村 功・松山智弘「簸川南地区広域農業農地整備事業に伴う 西谷15・16号墓発掘調査報告書」1993

川上 稔『古志本郷遺跡』『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第4集』1994

岸 道三「善行寺遺跡」「出雲市埋蔵文化財調査報告書 第7集」1997

川上 稔・松山智弘「出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う 矢野遺跡第2地点発掘調査報告書」1991

川上 稔『上長浜貝塚』1996

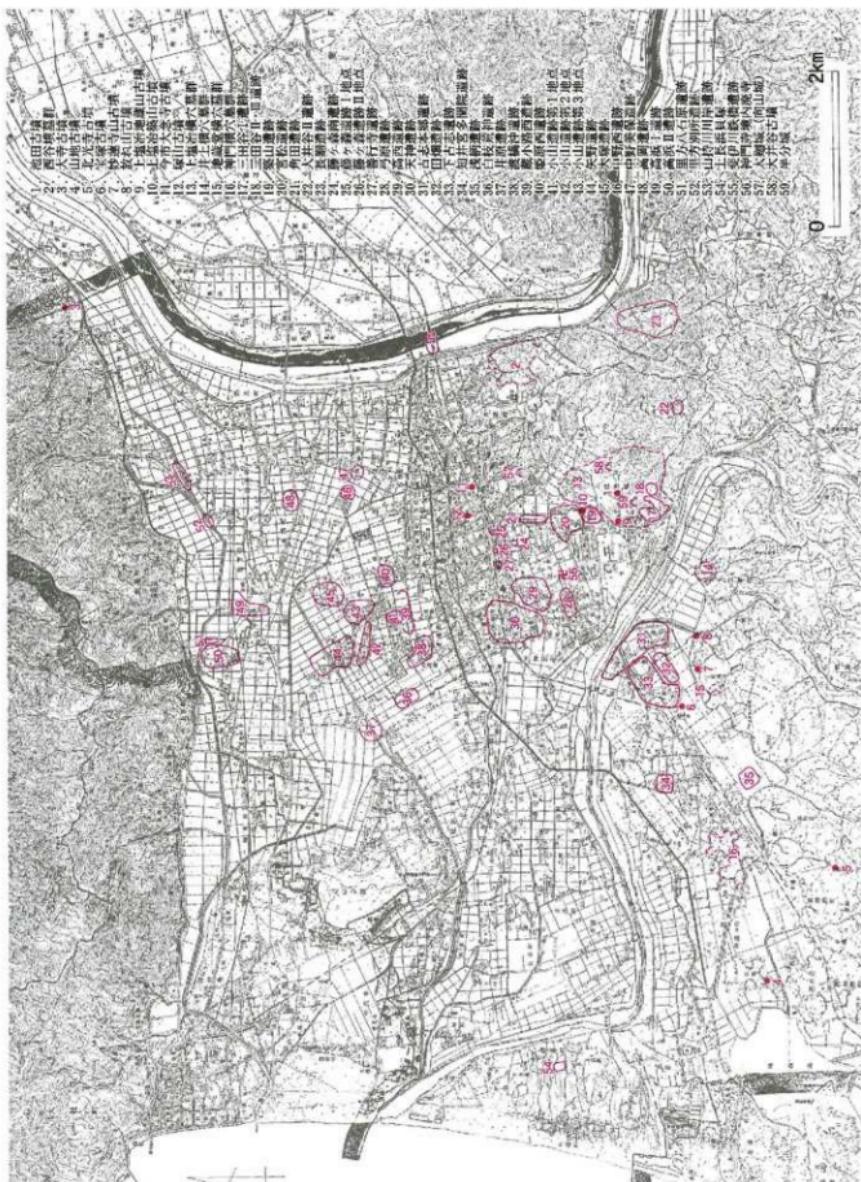
川上 稔『山持川川岸遺跡』1996

川上 稔・岸 道三・米田美江子「出雲市駅付近連続立体交差事業地内 天神遺跡第7次発掘調査報告書」1997

米田美江子・三原一将「市道松寄下小山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 白枝荒神遺跡」1997

松山智弘「市道本郷新宮線道路改良工事に伴う 古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書」1998

岸 道三「JR山陰本線・私鉄一畑電鉄連続立体交差事業地内 藤ヶ森遺跡（I地点・II地点）発掘調査報告書」1997



第2図 池田古墳と周辺の主要遺跡

- 藤永照隆『西谷墳墓群測量調査報告書』1998  
米田美江子『出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 藤ヶ森南遺跡』1999  
米田美江子『塩冶299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 三田谷I遺跡』2000  
三原一将『出雲ジュンテンードー敷地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高岡遺跡』2000  
三原一将『市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田畠遺跡』2000  
園山 薫『西出雲駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 浅柄遺跡』2000  
藤永照隆『西谷墳墓群－平成10年度発掘調査報告書－』2000  
坂本豊治『中野美保遺跡』『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集』2001  
米田美江子・三原一将『一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下古志遺跡』2001  
遠藤正樹『大井谷II』『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書III』2001

#### 鳥根県教育委員会編

- 足立克己『姫原西遺跡』『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1』1999  
間野大丞『蔵小路西遺跡』『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2』1999  
大庭後次『波瀬沖遺跡』『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告3』1999  
今岡一三『三田谷I遺跡(Vol.1)』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』1999  
熱田貴保『三田谷I遺跡(Vol.2)』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』2000  
鳥谷芳雄『三田谷I遺跡(Vol.3)』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX』2000  
平石 充『古志本郷遺跡I』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』1999  
勝部智明『古志本郷遺跡II』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XI』2001  
平石 充『長廻遺跡』『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XII』2001  
「斐伊川放水路 発掘物語 PART 5」1999  
「斐伊川放水路 発掘物語 PART 6」2000

#### その他

- 加藤義成『修訂 出雲國風土記参考』1981  
「西谷墳墓群」「古代の出雲を考える」1980 出雲考古学研究会  
「出雲平野の集落II一矢野遺跡とその周辺I」「古代の出雲を考える5」1986 出雲考古学研究会  
田中義昭ほか『矢野遺跡の研究』『山陰地域研究 第3号』1987 鳥根大学山陰地域総合センター  
田中義昭ほか『矢野遺跡の発掘調査』『研究成果報告書』1989  
渡邊貞幸ほか『西谷墳墓群の調査(I)』『山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究』1992 鳥根大学法文学部考古学研究室

## 第3章 池田古墳の調査

### 1. 古墳の立地（第1図）

池田古墳は、大井谷西側の丘陵が平野部へと延び出す尾根先端の頂部に位置する。南側後背部は丘陵が高くなっていくが、先端の北側及び東西は平野の見渡せる絶好のロケーションである。そこは約1300m×800mの範囲に広がる上塙治横穴墓群の範疇である。この古墳は試掘調査で発見されたもので、同丘陵上には古墳は周知されていないが、北・西側には巨大古墳である築山古墳・地蔵堂古墳が存在し、丘陵東側の大井谷側には上塙治横穴墓第8支群が、そこから丘陵奥300m付近には三田谷古墳群、さらに300m奥には光明寺古墳群が存在する。

### 2. 調査前の状況（第3図）

調査前は、山林で、丘陵北側の築山集落から丘陵南奥の三田谷へ抜ける獣道が通っていた。獣道は墳端を南東から北西方向に削っており、また東側・北側は岩盤の露出しているところが後世の石切場となっており、崩壊して崖状となっている。そのため、古墳の位置する丘陵は痩せている。また南東獣道が延びる所は所々地面が露出しており、盛土がほとんど流れ出し、地形が緩やかに延びてしまっている。

墳頂部から西北側にテラス状の平坦面があり、当初は前方後円(方)墳の可能性も考えたが、調査の結果、区画溝が確認でき、またコンタの形より方墳であろうと判断した。

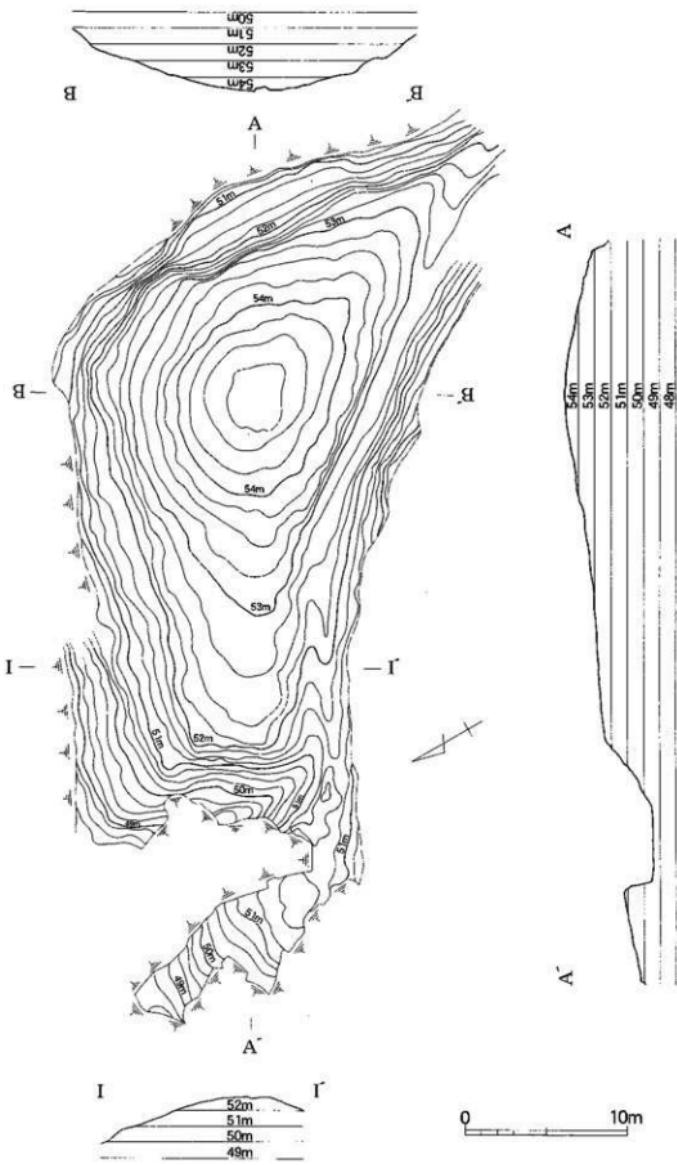
### 3. 墳丘の概要（第4～9図）

墳丘は、基本的に地形を利用した造りで、N-60°-Wに位置する。

南側の後世の掘削・崩壊・崩れは著しいが、直線的に延びる辺が2辺確認でき、区画溝も直線的な辺を描いているので、墳丘形態は方墳と考えられる。地形的に生きの良い北側に膨らみ、痩せた南側は膨らみの少ない方形を呈するようである。その膨らみをもつ北側には段築と考えられるような段状をわずかに確認できるが、断定するには至らない。また葺石は認められなかった。

墳丘規模は、前記しているように後世の掘削・崩壊・崩れのため、確かな測量値を出すことは不可能であるが、およそ長さ15～18mと推定される。高さは現状で1.9mを測るが、実際は石棺上部の欠損部分と蓋石を想定しその上に封土が載せてあることを想定すると、3mはあったと考えられる。

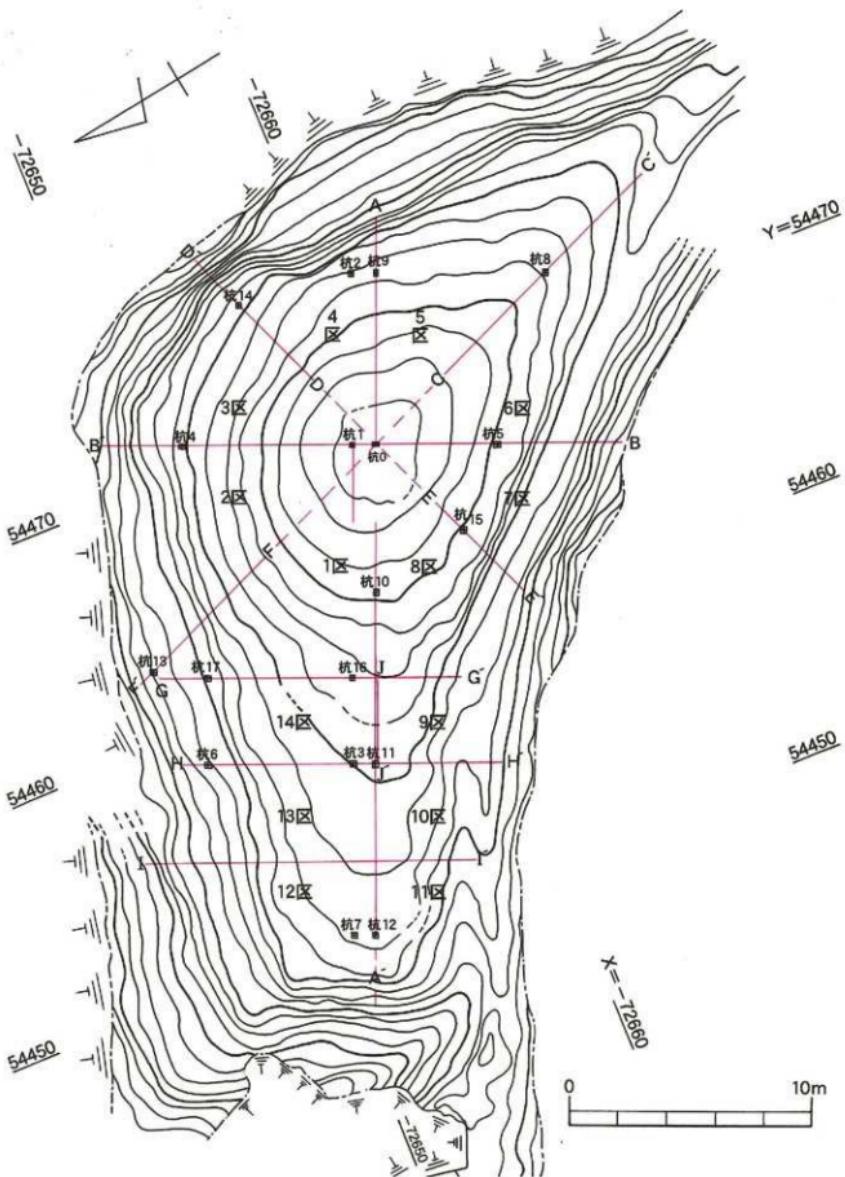
表土下には、1層または2層が堆積している。1層は表土及び地山との混合的な要素を呈する黄褐色かかった粘質土である。2層は地山ブロックを含んだ粘質土で、1層に比較すると人工的な要素を呈するため古墳の盛土の可能性がある。このように後世の掘削等で確實な盛土を確認することはできず、2層または擾乱されではいるが1層にその可能性がある。墳裾付近に堆積している6層などは流土であると考えられる。



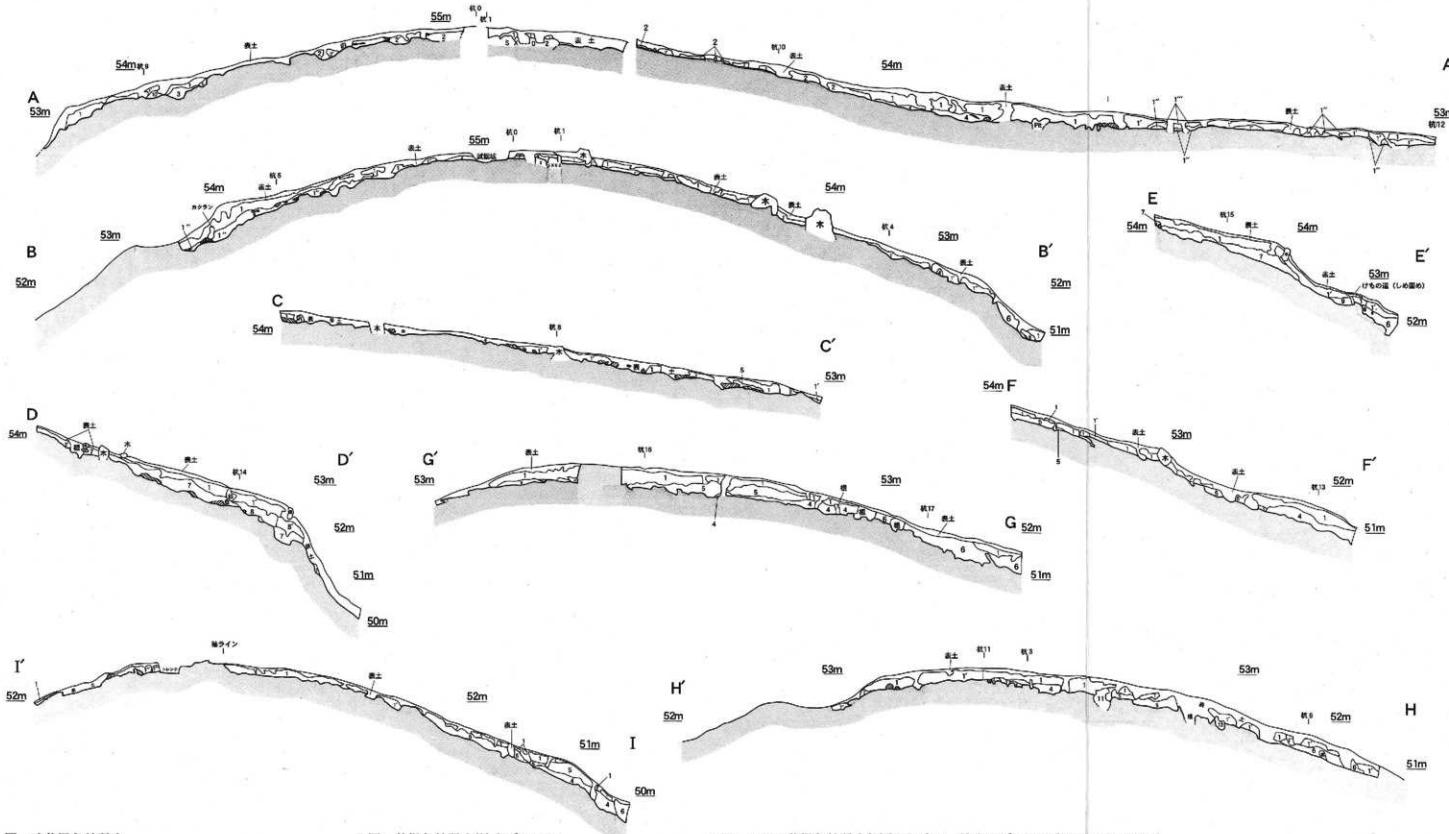
第3図 調査前地形測量図 ( $S=1/500$ )



第4図 調査後地形測量図 ( $S = \frac{1}{200}$ )



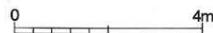
第5図 調査内区割り及び土層断面配置図 ( $S=1/200$ )



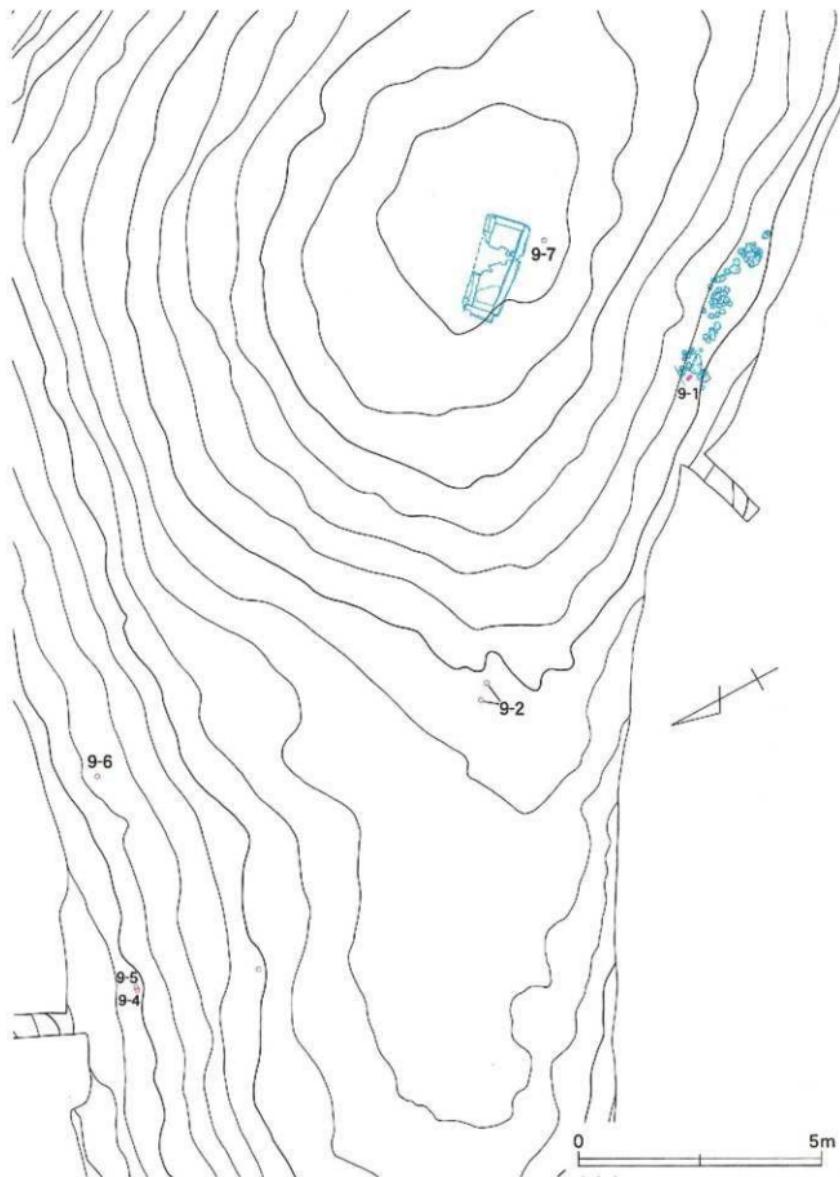
1 層 暗黄褐色粘質土  
 1' 層 暗黄褐色粘質土(基本的には1層だが、1層より根っ子が多く入り、粘性弱い)  
 1'' 層 黄褐色粘質土(1層と地山の混合層)  
 1''' 層 暗黄褐色土(基本的には1層だが、灰緑色地山小粒子を含み堅くしまった層、粘性あり)  
 2 層 にぶい黄褐色土(古墳の盛土?)  
 2' 層 2層に1層が入り込んだ層

3 層 茶褐色粘質土(地山ブロック含みソフトである)  
 4 層 暗褐灰色粘質土(暗褐色土・地山ブロック含む。1層と比べるとしまっている)  
 5 層 黄灰褐色粘質土  
 6 層 茶褐色粘質土

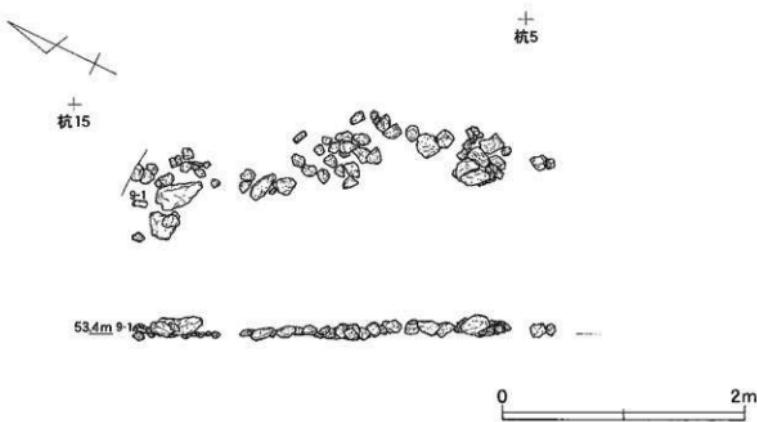
7 層 にぶい黄褐色粘質土(2層より暗い、地山小ブロック含みソフトである)  
 8 層 暗茶褐色土(粘性強く、ソフトである)  
 9 層 にぶい黄褐色粘質土(しまって固い)  
 10 層 黄茶褐色粘質土(3層より黄色味おび、しまっている)  
 11 層 暗茶褐色白粘質土  
 12 層 暗黄褐色粘質土(地山微小ブロック全体に含む)



第6図 土層断面図 ( $S = \frac{1}{50}$ )



第7図 遺構外遺物出土状況図 ( $S = \%$ )



第8図 7区出土石棺石及び鉄斧拡大図 ( $S=1\%$ )

南西墳丘斜面7区では、標高53.4mという同レベルにおいて、石棺と同材の石の集中する箇所を検出した。墳丘斜面も方形に掘削されたような状況を呈しており、後世の盗掘時に墳丘斜面ごと掘削されたと考えられ、その部分におそらく盗掘時に壊した石棺石（蓋石）を捨てたのであろう。

これらの石と共に鉄斧が1点(9-1)出土した。袋状を呈し、肩は持たず、刃部へと自然に幅広となって移行する。長さ10.8cm、幅4.4~5.2cm、最大厚3.4cm、現重量380gを測る。袋内部にはドロが錆化して詰まっている。

#### 4. 周溝（第4~7・9・10図）

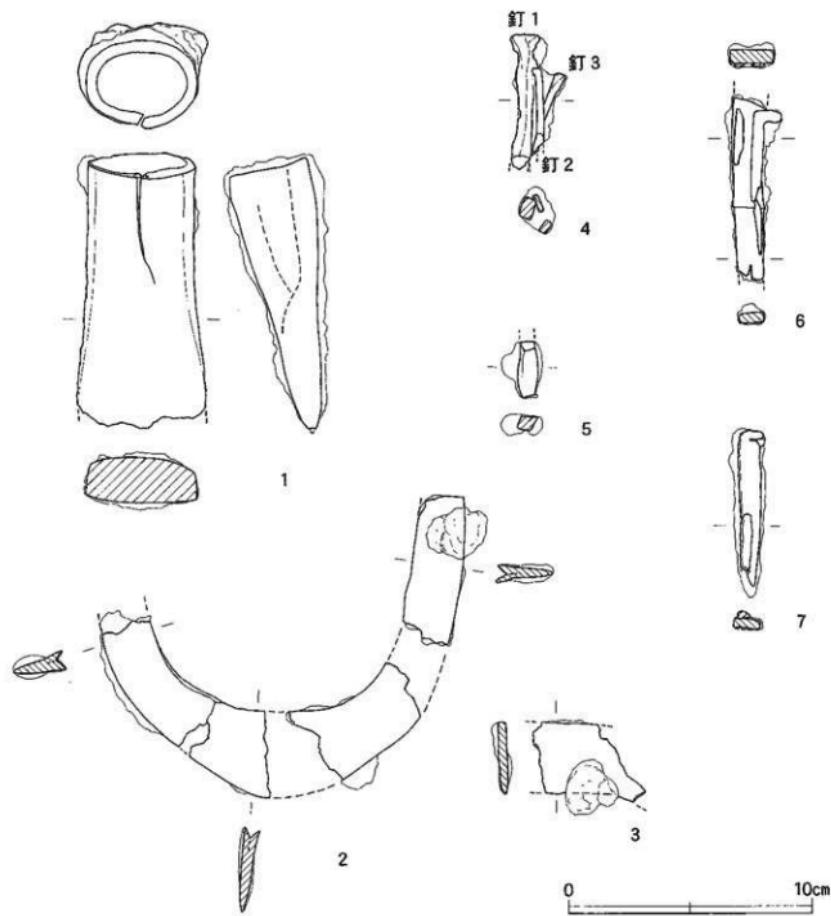
8・9・1・14区内に幅約3.5mの溝状遺構を検出した。この溝状遺構は、埋葬施設の存在する丘陵を区画するように配置されており、当古墳を方墳と決定づけたものである。延長距離8.5m、深さ10~20cmを測る浅いもので、溝内堆積土は4層（暗褐色灰色粘質土）である。

#### 出土遺物

周溝内より鉄器が4点出土した。9区内のJ-J'上層断面付近からの出土で、うち3点は同一個体と考えられるU字状鍔（鈍）先（9-2）である。全体現存復元長12.5cm、全体現存幅14.8cm、幅2.1~3.6cm、厚さ0.4~0.8cmを測る。それぞれの断面はY字状を呈し、刃部断面は2枚を張り合わせて作られたもののように風化して隙間が空いている。刃先端部はやや尖り気味の残存状態を呈している。9-3は板状の鉄器である。内湾する刃が刃部を有するので、鎌の可能性を考えたい。

#### 5. 埋葬施設

墳頂部には2基の主体部が検出された。SX01は試掘当初から箱式石棺として検出されていたが、



第9図 周溝及び遺構外出土遺物実測図 ( $S = \frac{1}{2}$ )

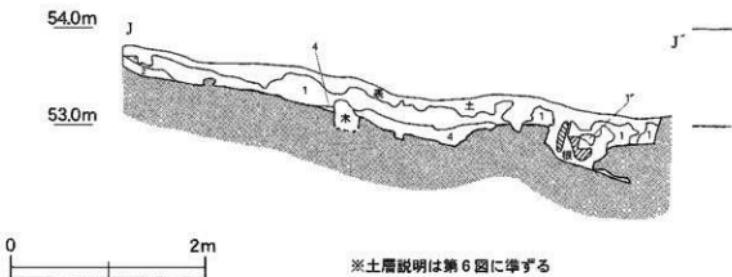
本調査により平行する S X 0 2 (土壤) を検出した。2基はN-45°-Wに位置し、墳丘の軸とは若干ずれている。

#### S X 0 1 (第11~16図)

##### 概要

S X 0 1 は、墳頂部南側に位置する箱式石棺である。盜掘を受けており、蓋石の残骸もなく、側石は上部が破壊され、北東側石は1/2を床石は中央部を破壊されていた。

石棺内堆積土は、盜掘時の破壊の際に流入したものであるが、床面直上に堆積している4層 (暗灰



第10図 J-J' 土層断面図 ( $S=\%$ )

褐色粘質土)のみは本来の棺内自然堆積物であると考えられる。また10層は石棺設置時の裏込め土である。

#### 墓坑

箱式石棺を埋設している土壤は、長軸2.3m、南東側幅110cm、北西側幅80cmと南東側が幅広となつておらず、現存深さ20~30cmを測る。北西側が尖った平面形を呈するが、攪乱による崩壊で、実際は両サイド幅の異なる長方形を呈する。長辺両サイドには幅15~20cm、高さ5cm未満のステップをもつ。

#### 箱式石棺

箱式石棺は外寸が長軸2.1m、南東側幅85cm、北西側幅70cmを測り、内寸が長軸1.75m、南東側幅60cm、北西側幅40cm、側石厚さ10~15cm、床石厚さ10cm強、現存深さ30cmを測る。墓壙と同様南東側が幅広である。幅広の南東側が頭位と考えられる。

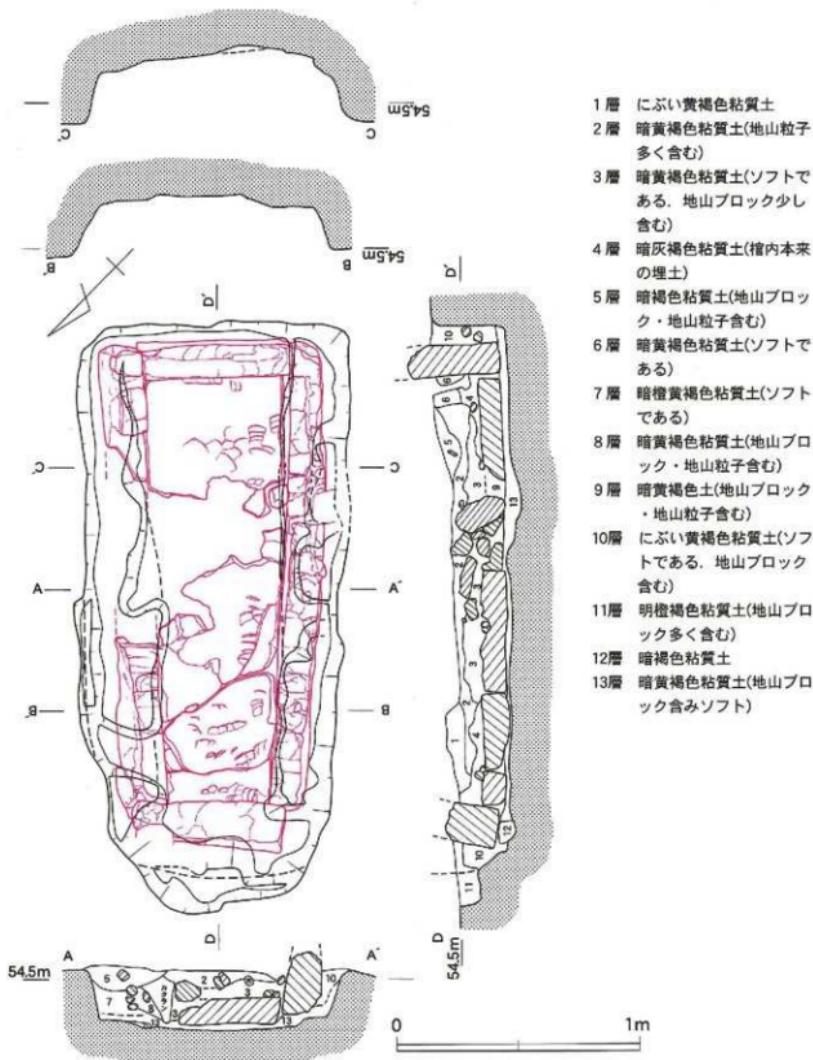
側石と小口石の組み合わせ方も両方で異なっており、南東側は両側石で小口石を挟み、北西側は両側石を小口石が押された状況を呈している。これは石棺の設置方法によるものと考えられる。墓壙壁の残りの良い南東側の小口石を床面にまず設置し、次に床面に床石を両サイドのステップ上に側石を設置し、最後に北西側の小口石を全体に押さえるように設置したためと考えられる。

両小口石は1枚石、南西側側石も1枚石、北東側側石は崩壊しているが1枚石であったと考えられる。床石も崩壊しているが、小口石程度の大きさのもの3枚以上であったと考えられる。またどの石にもノミ痕が観察される。南東側小口石には1.5~3cm幅の縦方向のノミ痕が、北西側小口石には1cm幅の縦方向の細かいノミ痕が、南西側側石には1~1.5cm幅の若干細かい縦方向のノミ痕が、北東側側石には2~2.5cm幅の縦方向のノミ痕が観察される。床石は4~9cm幅のノミ痕が観察され、側石とは加工工具が異なるようである。

石材は砂岩であり、周辺の石切場から切り出されたもののようにある<sup>3)</sup>。

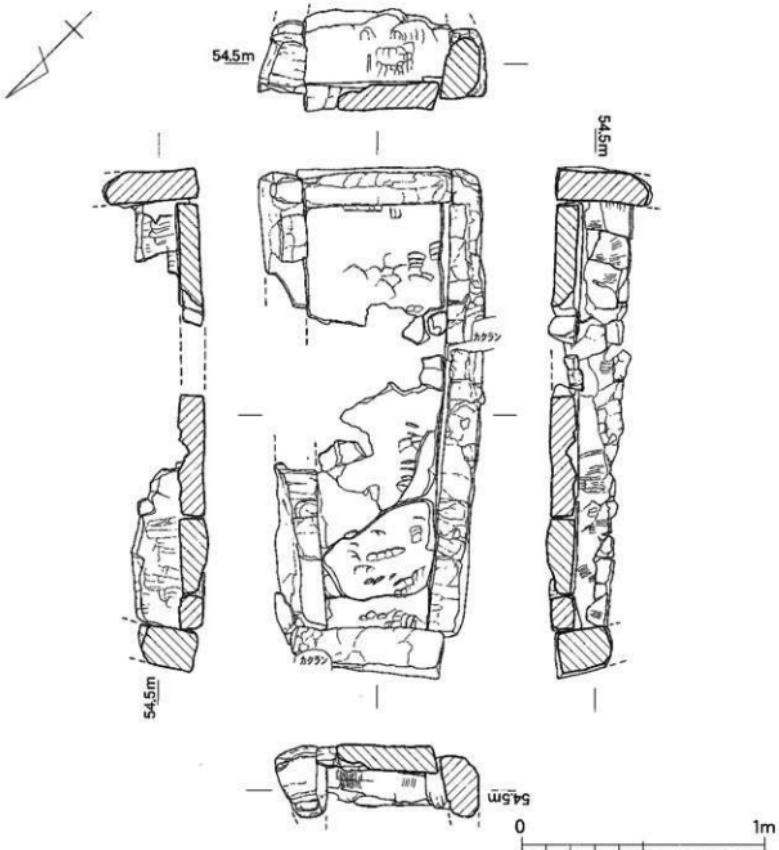
#### 出土遺物

盗掘を受けているため、元況で出土した遺物は皆無である。石棺の盗掘により破壊された付近で遺物が多く出土していることを考慮すると、盗掘中に引き出されたものが小さくてこぼれ落ちて残存していたような出土状況である。



第11図 SX01 実測図 ( $S=1\%$ )

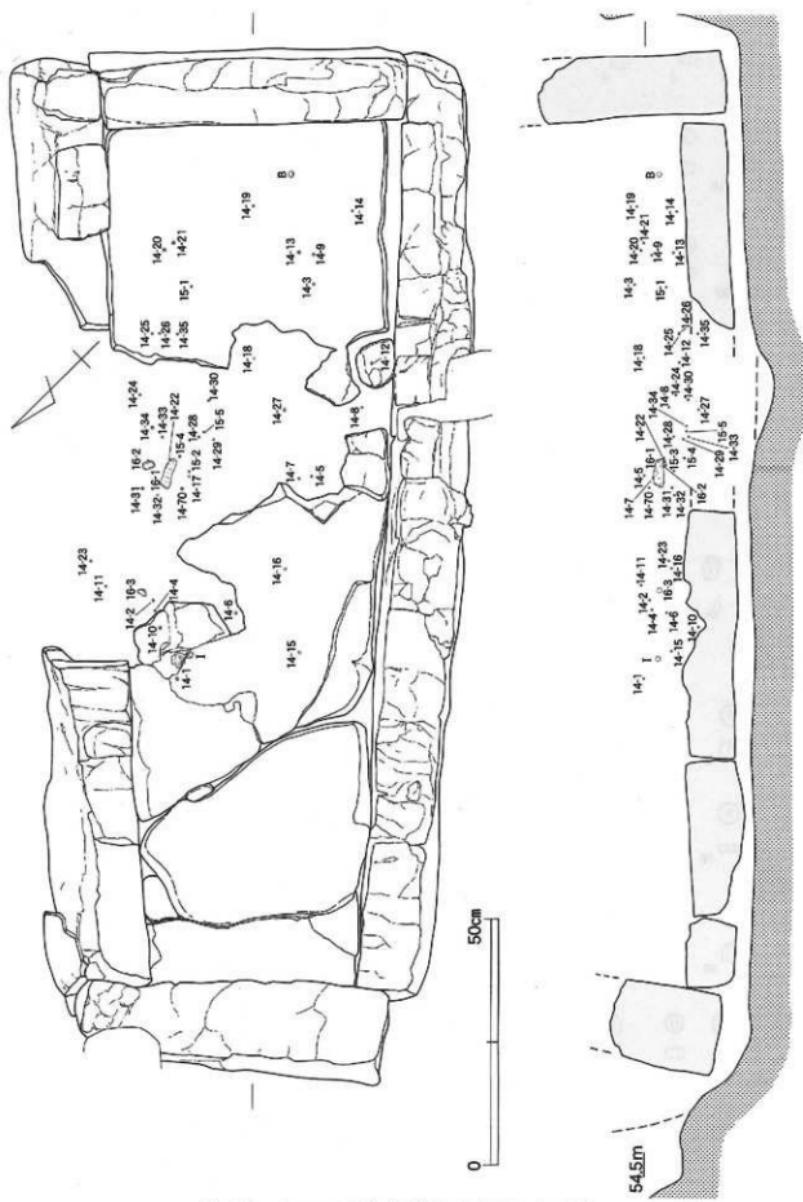
出土遺物は、ガラス玉73個（うち2個は鉄製品に付着(16-2)）、白玉68個+約10個体分（復元不可能  
な破片）、鉄剣1点、器種不明の鉄製破片1点、小型仿製鏡小破片1点である。



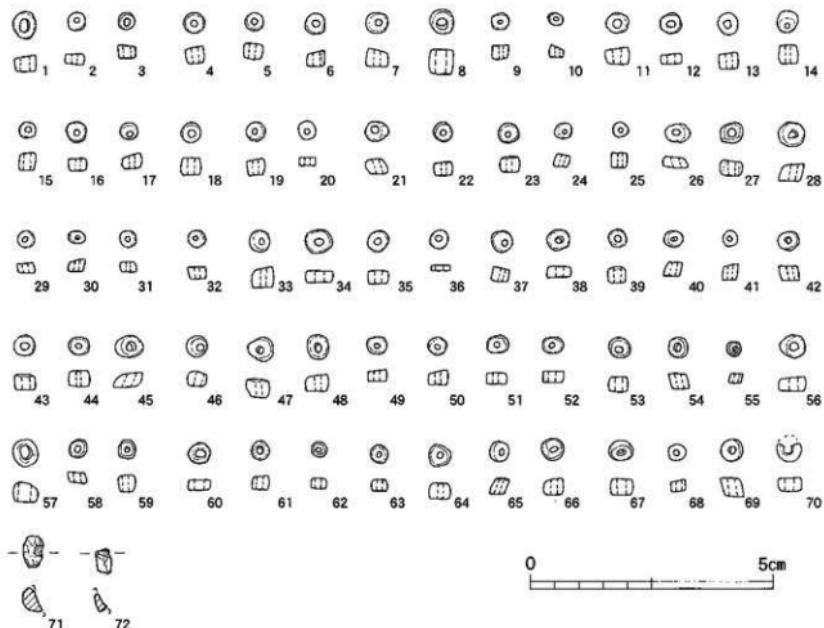
第12図 SX 01 石棺実測図 ( $S = \frac{1}{6}$ )

14-1~72はガラス玉である。スカイブルーを呈するものがほとんどであるが、濃紺を呈するものに34・38・71・72がある。ほとんどのガラス玉は上下両面にカット面を明瞭にもち、その稜線(角)が、片面は鋭利で、もう片面は丸みを帯びている場合が多い。丸みは研磨されて施されたものようである。ただし20のみは両面とも稜線が鋭利である。このようなガラス玉は棒に管状のガラスを作り、それを擦り切りして作り上げたもの<sup>22</sup>と考えられる。57のみは孔径が大きく全体に丸みを帯び、カットされたような面が見受けられず、前記したようなカットガラスとは異なる可能性がある。

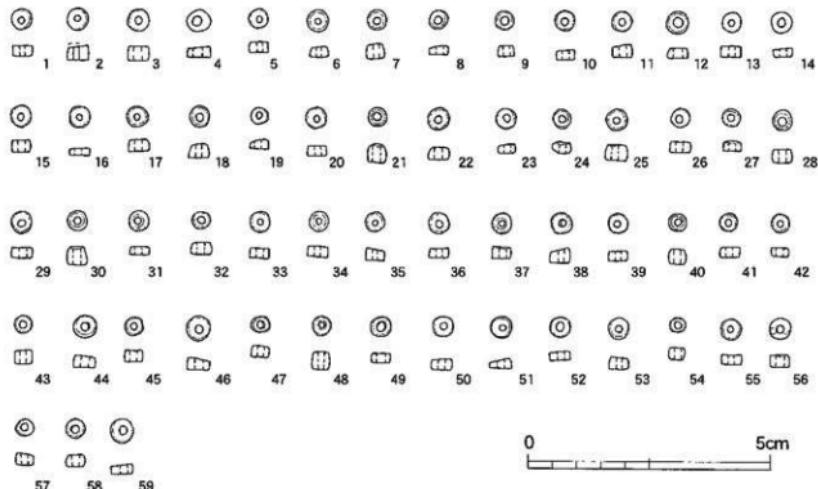
15-1~59は凝灰岩か頁岩で作られた白玉である。粉っぽく灰白色を呈するものと堅緻で灰色を呈するものに分類できるが、これは材質の違いであるのか、風化の度合いであるのかは判断できない。全面研磨により成形され、穿孔痕が明瞭に残っているものが多く見られる。



第13図 S X 0 1 石棺内遺物出土状況図 (S=%)



第14図 S X 01 石棺内出土ガラス玉実測図 (S=1/1)



第15図 S X 01 石棺内出土ガラス玉実測図 (S=1/1)

ガラス玉の直径は、最大値6mm、最小値3mm、平均値4mm。長さは、最大値5mm、最小値1mm、平均値2.9mmを測る。孔径は1mm大、1.5mm大、2mm大のものがあり、平均値は1.55mmである。

白玉の直径は、最大値5mm、最小値3.5mm、平均値4.2mm。長さは、最大値3.5mm、最小値1mm、平均値2.4mmを測る。孔径は1mm大、1.5mm大、2mm大のものがあり、平均値は1.6mmである。

以上のように、ガラス玉と白玉のそれぞれの平均値を比較するとほぼ同規格ではあるが、最大値と最小値が、ガラス玉は幅があり、白玉は差が小さい。また第14・15図を見ると、白玉は規格性が強いが、ガラス玉の方は大きさ、形が不規則であることが判る。前記したように、ガラス玉が不規則であるのは、その作り方によるものであろう。

16-1は鉄剣で、破片3点により刃部下端から茎上半部に復元されたものである。関は丸みを帯びて不明瞭であり、茎は茎尻に向かって直線的に細くなる。茎には目釘穴が2ヶ所観察される。16-2はガラス玉が2個付着した鉄製品である。ガラス玉を装着させた鉄製品というより、粘着材化した鉛により密接していたガラス玉が2個付着したものと考えられる。鉄製品は断面四角形で中空の角状のものであるが、器種は不明である。ガラス玉は2個ともスカイブルーを呈し、カットガラスである。16-3は青銅製の小型仿製鏡の小破片である。外縁付近と考えられ、稜線をもつて断面が厚くなる。石棺内からは同じ青銅の1×0.5cmの大いな小破片が出土しており、同一個体の可能性がある。

#### S X 0 2 (第17図)

#### 概要

S X 0 2は、墳頂部北側に位置するS X 0 1に平行して築かれた土壙で、表土を掘削して精査中に検出したものである。

堆積土は、基本的に1層（暗黄褐色粘質土）であるが、根の攪乱などにより残りは良くない。

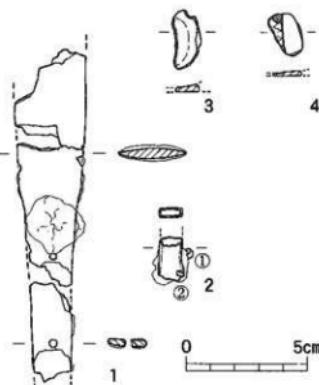
#### 墓坑

長軸2.3m、幅90~100cm、現存深さ10~20cmを測る、長楕円形を呈するものである。床面・壁面なども根による攪乱で崩壊しており、また深さも浅いため、詳細は不明である。ただし、S X 0 1に平行して築かれ、規模もS X 0 1と似ているため、同様な主体部として取り扱った。

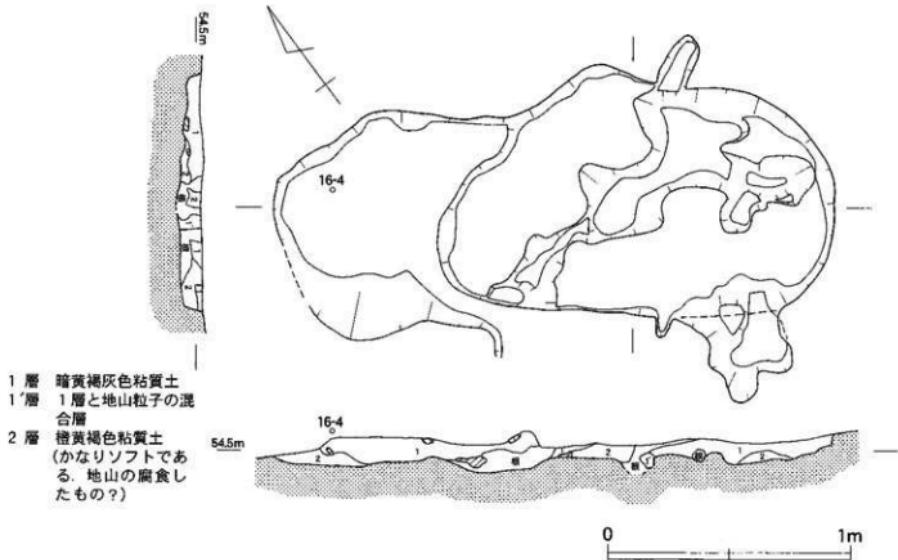
#### 出土遺物

S X 0 2としての遺物は皆無であった。

しかし北西端の上面表土中から小型仿製鏡の小破片が1点出土した。16-4がそれである。S X 0 1から同様な小破片が出土していることより、この遺物はS X 0 1のものである可能性が高い。16-4は外縁付近の破片で段をもつ。外縁には鋸歯文が確認でき、朱が付着しているようである。外縁から外区に



第16図 S X 0 1 石棺内出土鐵器及び  
青銅器実測図 (S=1/2)



第17図 SX02 実測図 ( $S=1/20$ )

かけて付着している銅色の石片は、鏡と共に磨かれ光沢を放っている。

#### 6. その他の出土遺物（第7・9図）

9-4・5は13区から、9-6は14区から、9-7は7区SX01付近から出土した鉄製品である。9-4・5・7は釘である。4は3本の、7は2本の釘が鏽により付着したものである。4は、本体となる釘1は角柱状の釘で頭は楕円形で潰れており、釘2は角柱状を呈するが平べったく潰れた様子が窺え、釘3も角柱状である。5は角錐状で先端が細くなる。6は闊状を呈する部位と孔の痕跡をもつ角柱状の器種不明の鉄製品に釘状の鉄が数本付着しているものである。7は、本体となる角柱状で頭の潰れた釘に小さな釘が付着したものである。

これらは表土から地山面直上より出土している。今回調査範囲内より出土した土器は小破片46点のみであり、実測可能なものは皆無であった。そのためこれらの鉄釘の時期を確定することはできなかつた。またこれら46点の土器片であるが、須恵器4点、土師器14点、あとは陶磁器類である。

注1 中村氏よりご教授いただいた。

注2 小瀬康行「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌73-2』1987 日本考古学会

## 第4章 まとめ

### 第1節 池田古墳の位置づけ

池田古墳は、後世の開墾・削平などによる崩壊も著しいが、堅穴式石室に箱式石棺を伴う方墳であろうことが判明した。

出土遺物は、残存していたもので、副葬品として石棺内から玉類（ガラス玉・白玉）約150個、鉄剣1点、小型仿製鏡1点及び鉄斧1点と工具として周溝からU字状鋤（鏁）先1点であり、土器の出土は見なかった。

玉類のうちガラス玉は弥生時代から継続して使用されているものであるが、白玉は古墳時代中期以降から出現する遺物であるとされている<sup>31</sup>。一般的に白玉は滑石で製作されたものであるが、当古墳では凝灰岩または頁岩により製作されている。

鉄製農耕具<sup>32</sup>のうちU字状鋤（鏁）先は、松井氏分類のA<sub>2</sub>類（本来のU字状を呈していて、刃先部の幅が耳部の幅とあまり変わらないもの）に分類できるため、「5世紀中頃から後半頃に出現し、以後古墳時代の鉄製U字形鋤・鏁先の主流を占めるようになる。」ものである。

袋状鉄斧は古瀬氏分類のB<sub>2</sub>類（肩部を有さない袋状のもので、全長7～14cm・刃部幅3～6cm内のもの）に分類できるため、弥生時代から古墳時代全般を通じそれ以後も残存するタイプである。

以上より、池田古墳は古墳時代中期後半（5世紀後半）に築かれたものと考えられる。

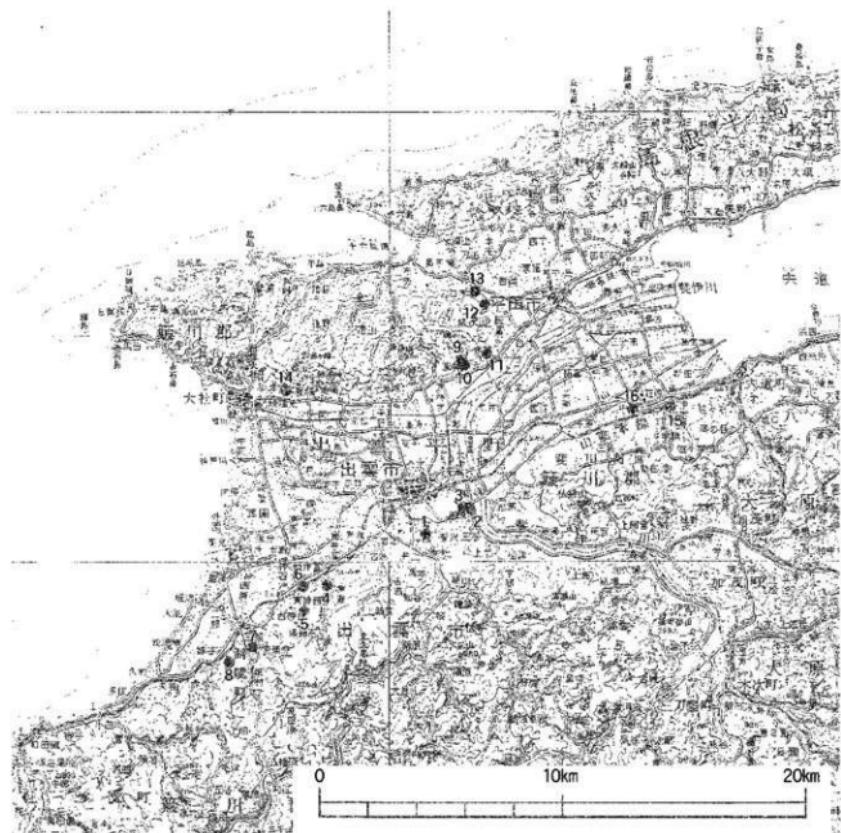
池田古墳の存在する丘陵上には、他の古墳は周知されていない。また周辺の築山古墳・地蔵堂古墳・大井谷古墳・三田谷古墳群・光明寺古墳群・上塙治横穴墓群など、全て後・終末期古墳である。そのため現状では中期古墳が1基単独で築かれている状況である。

### 第2節 出雲平野の中期古墳

出雲平野には新発見の池田古墳の他に周知されている中期古墳は少ない。また調査された例としては、当該古墳以外に丁之内古墳・西谷15・16号墓・美談神社古墳群・左皿古墳群・草原古墳がある。

第18図より、現在確認されている中期古墳は大きく5グループに分かれている。第1群は当池田古墳・西谷15・16号墓の所在する斐伊川と神戸川に挟まれた地域、第2群は神西湖南東地域、第3群は現在の斐伊川が東流する付け根で北山が大きく谷に入り込む地域、第4群は大社町内に1基確認されているもの、第5群は斐川町の南山北麓の支丘最先端地域である。

第1群は、当池田古墳の他に、西谷墳墓群内のうち調査された15・16号墓が判っており、それぞれ1辺約15mの方墳、径11mの円墳である。15号墓の埋葬施設は長方形の土壙が1基で、刀子1点と須恵器・土師器が出土している。16号墓は箱式石棺を伴い、棺外より側石に沿うように、鉄剣2点、鉄斧1点、U字状鉄鋤（鏁）先1点が出土している。池田古墳と西谷15・16号墓とは狭義においては距離的に遠いが、16号墓は箱式石棺を伴い出土している鉄器の組み合わせに関連性を認めることができる。但し、西谷16号墓出土の鉄器には祭祀的な要素が強く窺われる鉄剣、国内ではほとんど見られない形



第18図 出雲平野中期古墳分布図（20万分の1）

式の鉄斧を伴っていること<sup>93</sup>、また池田古墳で見つかったような小型仿製鏡・玉類を副葬していない点は、この2基の古墳の存在差を認めることができる。池田古墳からは南方面へ抜ける獣道が現在でも残っており、それを伝うと三田谷I遺跡へと到達する。同遺跡からは中期集落が見つかっている。

第2群は、神西南東の丘陵上に所在する。山雲市に所在するグループと湖陵町に所在する小グループに分かれる。箱式石棺を伴う浅柄古墳。全長65mを測る前方後円墳である北光寺古墳は小口積みの竪穴式石室を伴い、石室から2本の鉄劍が出土したとされている。南丘陵から派生した小支丘頂部に位置する丁之内古墳は、全長10mの方墳であろうと推定されており、副葬品として鉄劍1点と鉄鎌束(10本)が出土している。これらより西の神西南にある台地状の低丘陵に位置する雲部古墳3号墳は、長辺16m、短辺12mの楕円形を呈する墳形で、埋葬施設は竪穴式石室と考えられている。

これより南西に位置する別の丘陵には径11mの円墳である柿木田古墳が存在し、箱式石棺を伴って

第1表 出雲平野中期古墳一覧表

グループ名	古墳名	墳形(規模)	埋葬施設	出土遺物
第1群	1 池田	方墳(15m)	箱式石棺	小型彷彿鏡、鉄劍、U字状鉄錐(頭)先、鉄斧、玉
	2 西谷15	方墳(15m)	土塚	刀子、土器
	3 西谷16	円墳(11m)	箱式石棺	鉄劍、U字状鉄錐(頭)先、鉄斧
第2群	4 浅柄		箱式石棺	
	5 北光寺	前方後円墳(65m)	小U積み竪穴式石室	鉄劍
	6 丁之内	方墳(10m)		鉄劍、鉄鎌(10本)
第3群	7 雲部3	格円形墳(16×12m)		
	8 柿木田	円墳(11m)	箱式石棺	
第4群	9 平林寺山6		箱式石棺	
	平林寺山7		箱式石棺	
	10 膳棚山3	円墳(8m)?	箱式石棺	
第5群	11 美談神社1		箱式石棺	
	左皿6	方墳(10m)	箱式石棺	刀子、鉄鎌
	左皿7	方墳(10m)	箱式石棺	
第6群	13 森田	方墳(13m)	箱式石棺+蓋石に繩掛突起付く	
	14 西組		箱式石棺	
第7群	15 軍原	前方後円墳(50m)	長持形石棺	直刀、小札(甲冑)、玉、貝輪、鏡
	16 神庭岩船山	前方後円墳(60m)	舟形石棺(繩掛突起付く)	円筒埴輪破片

いる。これらの周辺地域には、浅柄古墳が位置する丘陵北東下に浅柄遺跡が存在し、中期の遺構・遺物が確認されており、当時の集落を形成していた可能性が考えられる。また雲部古墳・柿木田古墳が存在する周辺丘陵、低湿地には、竹崎遺跡・庭反遺跡・雲部遺跡・西安原遺跡・姉谷恵比寿遺跡・姉谷柿木田遺跡・只谷皿遺跡など多くの集落遺跡が見つかっている。

第3群は、出雲市と平田市の市境に所在するグループとそれより北方の谷奥へ入った小グループに分かれる。北山南麓に位置する平林寺山古墳6・7号墳、同丘陵の南側頂部に位置する膳棚山古墳3号墳、これらより東位の丘陵裾野に位置する美談神社古墳1号墳には、箱式石棺が確認されている。谷奥へはいると10m前後の規模を持つ方墳の左皿古墳6・7号墳が所在し、共に箱式石棺を伴う。6号墳は石棺内から刀子と鉄鎌各1点が出土している。これより若干谷に入った低丘陵上に所在する森田古墳は、1辺約13mの方墳で箱式石棺を伴い、蓋石には繩掛突起が付く。

第4群は大社町に所在する北山南麓に位置する西組古墳で、箱式石棺が確認されている。周辺には関連する遺跡は未確認であるが、第3群と共に北山南麓地域としての関連性が窺われる。

第5群は斐川町に所在する南山から丘陵が平野部に最も伸びた北麓に位置する軍原古墳で、全長約50mの前方後円墳である。長持形石棺を伴い、内底部には27cmもの厚さに疊が詰めてあったという。副葬品として、直刀・勾玉・管玉・小札(甲冑)・鏡・貝輪(クモ貝製)等が出土している。これよ

り西側に位置する別の支丘最先端には全長60mと推定される前方後円墳の神庭岩船山古墳が存在する。繩掛突起をもつ舟形石棺を伴い、副葬品は不明である。葺き石はないが円筒埴輪の破片が出土する。周辺の低丘陵上には古墳・遺物散布地が広がっている。

以上5グループを概観すると、10m規模の円墳・方墳に箱式石棺を伴うパターンが多く、出土遺物も判明したものでは、鉄劍などの鉄器が多い。第5群の前方後円墳2基は箱式石棺ではなく長持形石棺・舟形石棺を伴い、第2群の前方後円墳である北光寺古墳も箱式石棺ではなく小口積みの竪穴式石室を伴っており、前記したものより出土遺物の状況からも上の階級を示すと考えられる。

これらの古墳が築かれる以前の前期古墳には、第2群内の山地古墳、第3群の大寺古墳が存在するのみである。これら中期古墳群の存在する地域に共通する点は、これ以降後期にかけて古墳が築かれ続けるということである。しかし前期から中期古墳を築いた人々の生活の痕跡は前記した三田谷I遺跡・浅柄遺跡など神西湖より東域では少ないと、神西湖南西城では集落が集中しており、当該期に出雲平野中央域から外縁部へと人の流れを感じることができる。

以上、出雲平野では古墳時代初頭に拠点的な集落が放棄され、それに続く古墳時代前期から中期にかけての動向が今ひとつ不明である。今後隠れた場所からの発見が成されることを期待したい。

注1 伊藤雅文「玉・石製品」「季刊考古学 第28号」1989 雄山閣

伊藤雅文「5装身具 C玉類」「古墳時代の研究 8古墳II副葬品」1998 雄山閣

注2 松井和幸「日本古代の鐵製鍛先、鍛先について」「考古学雑誌 72-3」1987 日本考古学会

古瀬清秀「4農耕具」「古墳時代の研究 8古墳II副葬品」1998 雄山閣

注3 間接的に愛媛大学助教授村上恭通氏よりご指摘を得ている。

## 参考文献

\*島根県教育委員会『出雲・上塙治地域を中心とする 埋蔵文化財調査報告』1980

\*川上 稔「丁之内古墳」「出雲電車基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1981 出雲市教育委員会

\*川上 稔「膳棚山・半林寺山古墳群」「出雲市埋蔵文化財調査報告書 第1集」1988 出雲市教育委員会

\*西尾克己・大國晴雄「出雲平野の古墳」「出雲市民文庫9」1991 出雲市教育委員会

\*島根県教育委員会『増補改訂 島根県遺跡地図 I (出雲・隠岐編)』1993

\*出雲市教育委員会『出雲市遺跡地図』1993

\*川上 稔・湯村 功・松山智弘「簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う 西谷15・16号墓発掘調査報告書』1993 出雲市教育委員会

\*今岡一:「三山谷I遺跡(Vol.1)」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V」1999 島根県教育委員会

\*村上恭通「倭人と鉄の考古学」「シリーズ 日本史のなかの考古学」1999 青木書店

\*高橋智也・片倉愛美「光明寺3号墓・4号墓」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II」2000 出雲市教育委員会

\*岡山 真「西出雲駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 浅柄遺跡」2000 出雲市教育委員会

\*野坂俊之「湖陵町遺跡地図」2000 湖陵町教育委員会

\*西尾克己・野坂俊之「第二編湖陵町の歴史 第一章原始古代の湖陵町」「湖陵町誌」2000 湖陵町

玉類観察表

鉢岡番号	出土地点	材質 種類	直径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
14-1	SX01 北西区	ガラス 玉	5~5.5	3~3.5	2~3	0.1	スカイブルー	カットガラス
14-2	SX01 北西区	ガラス 玉	3.5	2~2.5	1	0.04	スカイブルー	カットガラス
14-3	SX01 南東区	ガラス 玉	3.5	2.5~3	1.5	0.04	スカイブルー	カットガラス
14-4	SX01 北西区	ガラス 玉	4.5	2.5~3.5	1.5	0.08	スカイブルー	カットガラス
14-5	SX01 南東区	ガラス 玉	4	3	1.5	0.06	スカイブルー	カットガラス
14-6	SX01 北西区	ガラス 玉	4.5	2.5~3.5	1.5	0.07	スカイブルー	カットガラス 気泡が破れ穴があいている
14-7	SX01 南東区	ガラス 玉	4.5	3~4	1.5	0.08	スカイブルー	カットガラス
14-8	SX01 南東区	ガラス 玉	5	5	2.5	0.12	スカイブルー	カットガラス
14-9	SX01 南東区	ガラス 玉	3.5~4	3.5	1~1.5	0.06	スカイブルー	カットガラス
14-10	SX01 北西区	ガラス 玉	3	1.5~2.5	1.5	0.01 以下	スカイブルー	カットガラス
14-11	SX01 北西区	ガラス 玉	5	3~3.5	2	0.08	スカイブルー	カットガラス
14-12	SX01 南東区	ガラス 玉	4.5	2	1.5~2	0.06	スカイブルー	カットガラス
14-13	SX01 南東区	ガラス 玉	4	3~3.5	1.5	0.08	スカイブルー	カットガラス
14-14	SX01 南東区	ガラス 玉	4	4	1.5	0.09	スカイブルー	カットガラス
14-15	SX01 南西区	ガラス 玉	4	3.5~4	1.5	0.07	スカイブルー	カットガラス
14-16	SX01 南西区	ガラス 玉	4.5	2.5~3	1.5	0.07	スカイブルー	カットガラス
14-17	SX01 北東区	ガラス 玉	3.5~4	2.5~3	1.5	0.05	スカイブルー	カットガラス
14-18	SX01 南東区	ガラス 玉	4	4	1.5	0.1	スカイブルー	カットガラス
14-19	SX01 南東区	ガラス 玉	4	3~3.5	1.5	0.06	スカイブルー	カットガラス
14-20	SX01 北東区	ガラス 玉	4	2	1~1.5	0.04	スカイブルー	カットガラス 両面とも丸が脱利
14-21	SX01 北東区	ガラス 玉	4	3	1.5	0.07	スカイブルー	カットガラス
14-22	SX01 北東区	ガラス 玉	4	2.5~3	1	0.05	スカイブルー	カットガラス
14-23	SX01 北西区外	ガラス 玉	4	3	1.5	0.08	スカイブルー	カットガラス
14-24	SX01 北東区	ガラス 玉	3.5	2.5	1	0.03	スカイブルー	カットガラス
14-25	SX01 北東区	ガラス 玉	3.5	3	1	0.04	スカイブルー	カットガラス
14-26	SX01 北東区	ガラス 玉	4~5	2	1.5~2	0.05	スカイブルー	カットガラス

標印番号	出土地点	材質 器種	直径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
14-27	S X 0 1 南東区	ガラス 玉	5×4	3	2	0.08	スカイブルー	カットガラス 平面形が方形を呈する
14-28	S X 0 1 北東区	ガラス 玉	5	3~3.5	2	0.11	スカイブルー	カットガラス
14-29	S X 0 1 北東区	ガラス 玉	4	2	1.5	0.04	スカイブルー	カットガラス
14-30	S X 0 1 北東区	ガラス 玉	3~4	2~3	1	0.04	スカイブルー	カットガラス
14-31	S X 0 1 北東区	ガラス 玉	3.5~4	2.5	1.5	0.03	スカイブルー	カットガラス
14-32	S X 0 1 北東区	ガラス 玉	4	3	1.5	0.04	スカイブルー	カットガラス
14-33	S X 0 1 北東区	ガラス 玉	4.5	3.5~4	1.5	0.11	スカイブルー	カットガラス
14-34	S X 0 1 北東区	ガラス 玉	5~5.5	2.5	1.5~2	0.1	淡紺色	カットガラス
14-35	S X 0 1 北東区	ガラス 玉	4	2.5	1.5	0.06	スカイブルー	カットガラス
14-36	S X 0 1 出土地不明	ガラス 玉	4	1	1.5	0.03	スカイブルー	カットガラス
14-37	S X 0 1 北東区石棺外	ガラス 玉	4.5	2.5~3	1	0.08	スカイブルー	カットガラス
14-38	S X 0 1 北東区2層	ガラス 玉	4~5	2~2.5	1~1.5	0.07	淡紺色	カットガラス
14-39	S X 0 1 北東区2層	ガラス 玉	4	3.5	1.5	0.07	スカイブルー	カットガラス
14-40	S X 0 1 北東区2層	ガラス 玉	4	3	1~1.5	0.06	スカイブルー	カットガラス
14-41	S X 0 1 北東区3層	ガラス 玉	3.5	3~3.5	1.5	0.05	スカイブルー	カットガラス
14-42	S X 0 1 北東区2層	ガラス 玉	4	3	1	0.06	スカイブルー	カットガラス
14-43	S X 0 1 北東区石棺外	ガラス 玉	4~4.5	3~3.5	1.5~2	0.08	スカイブルー	カットガラス
14-44	S X 0 1 北東区石棺外	ガラス 玉	4~4.5	3	1~1.5	0.07	スカイブルー	カットガラス
14-45	S X 0 1 北東区石棺外	ガラス 玉	5.5	2.5	2	0.08	スカイブルー	カットガラス
14-46	S X 0 1 北東区石棺外	ガラス 玉	4.5	3	1.5	0.07	スカイブルー	カットガラス
14-47	S X 0 1 北東区石棺外	ガラス 玉	5	3.5	1.5	0.11	スカイブルー	カットガラス
14-48	S X 0 1 北東区石棺外	ガラス 玉	5~5.5	3~3.5	1.5~2	0.1	スカイブルー	カットガラス
14-49	S X 0 1 南西区3層	ガラス 玉	4	2~2.5	1.5	0.04	スカイブルー	カットガラス
14-50	S X 0 1 北東区3層床下	ガラス 玉	4	2~3	1.5	0.05	スカイブルー	カットガラス
14-51	S X 0 1 北東区3層床下	ガラス 玉	4~4.5	2.5	1.5	0.05	スカイブルー	カットガラス
14-52	S X 0 1 北東区3層床下	ガラス 玉	4~4.5	2.5	1.5	0.05	スカイブルー	カットガラス
14-53	S X 0 1 北東区3層床下	ガラス 玉	4~4.5	3	2	0.07	スカイブルー	カットガラス
14-54	S X 0 1 北東区3層床下	ガラス 玉	4	3	2	0.06	スカイブルー	カットガラス

探査番号	出土地点	材質 器種	直径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
14-55	S X 0 1 北東区3層床下	ガラス 玉	3	2	1	0.03	スカイブルー	カットガラス
14-56	S X 0 1 北東区3層床下	ガラス 玉	5~5.5	2.5~3	2	0.09	スカイブルー	カットガラス
14-57	S X 0 1 北東区3層床下	ガラス 玉	5.5~6	3~4	2.5~3	0.1	スカイブルー	
14-58	S X 0 1 北東区3層	ガラス 玉	4	2	1.5~2	0.04	スカイブルー	カットガラス
14-59	S X 0 1 北東区3層	ガラス 玉	4	3~3.5	1	0.06	スカイブルー	カットガラス
14-60	S X 0 1 北東区石膏外	ガラス 玉	4.5	2	2	0.05	スカイブルー	カットガラス
14-61	S X 0 1 北東区石膏外	ガラス 玉	4	2.5~3	1.5	0.05	スカイブルー	カットガラス
14-62	S X 0 1 北東区石膏外	ガラス 玉	3	2	1	0.03	スカイブルー	カットガラス
14-63	S X 0 1 北東区石膏外	ガラス 玉	4	2.5~3	1.5	0.06	スカイブルー	カットガラス
14-64	S X 0 1 北西区	ガラス 玉	4.5	3	1.5	0.09	スカイブルー	カットガラス
14-65	S X 0 1 北東区3・4層	ガラス 玉	4	3.5	1.5	0.07	スカイブルー	カットガラス
14-66	S X 0 1 北東区3・4層	ガラス 玉	4.5	3~3.5	1.5~2	0.07	スカイブルー	カットガラス
14-67	S X 0 1 北西区	ガラス 玉	4~5	3.5	1~2	0.09	スカイブルー	カットガラス
14-68	S X 0 1 北東区石膏外	ガラス 玉	4	2~2.5	1	0.04	スカイブルー	カットガラス
14-69	S X 0 1 北東区3層	ガラス 玉	4	3.5	1.5	0.09	スカイブルー	カットガラス
14-70	S X 0 1 北東区	ガラス 玉	5	3	1.5	0.08	スカイブルー	カットガラス 一部欠損
14-71	S X 0 1 北東区3層	ガラス 玉			2	0.12	濃紺色	1/5存 外面は剥離状態 14-72と同一個体の可能性 あり
14-72	S X 0 1 北東区2層	ガラス 玉					濃紺色	1/5存 外面は剥離状態 14-71と同一個体の可能性 あり
15-1	S X 0 1 北東区	凝灰岩 白玉	4.5	2	1	0.04	灰白色	穿孔方向上から
15-2	S X 0 1 北東区	凝灰岩 白玉	4.5	3.5	1.5	0.05	灰白色	一部剥落欠損
15-3	S X 0 1 北東区	凝灰岩 白玉	4.5	3	2	0.07	灰白色	一部欠損
15-4	S X 0 1 北東区	凝灰岩 白玉	4.5	2	2	0.04	灰白色	
15-5	S X 0 1 北東区	凝灰岩 白玉	4	2	1.5	0.04	灰色	穿孔方向下から
15-6	S X 0 1 北東区2層	凝灰岩 白玉	4.5	2	1.5	0.04	灰白色	穿孔方向上から

採集番号	出土地点	材質 器種	直徑(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
15-7	S X 01 北東区2層	凝灰岩 白玉	4	3	1.5	0.05	灰白色	
15-8	S X 01 北東区2層	凝灰岩 白玉	1.5~2	4	1.5	0.03	灰白色	
15-9	S X 01 北西区床下	凝灰岩 白玉	4	2	2	0.04	灰白色	
15-10	S X 01 南東区	凝灰岩 白玉	4	2	2	0.04	灰白色	
15-11	墳頂部 表層	凝灰岩 白玉	4	2.5	2	0.04	灰白色	
15-12	S X 01 北西区	凝灰岩 白玉	4.5	2	2	0.03	灰白色	
15-13	S X 01 北東区3層	凝灰岩 白玉	4	2	1.5	0.05	灰白色	
15-14	S X 01 北東区2層	凝灰岩 白玉	4.5	1.5~2	1.5	0.04	灰白色	
15-15	S X 01 北東区2層	凝灰岩 白玉	4.5	2.5	1.5	0.05	灰色	
15-16	S X 01 南西区2層	凝灰岩 白玉	4	1~1.5	1.5	0.04	灰白色	
15-17	S X 01 南西区2層	凝灰岩 白玉	4	2.5	1.5	0.05	灰白色	穿孔方向下から
15-18	S X 01 北東区2層	凝灰岩 白玉	4	3	2	0.06	灰白色	
15-19	S X 01 北東区2層	凝灰岩 白玉	3.5	1.5~2	2	0.02	灰白色	
15-20	S X 01 北西区	凝灰岩 白玉	4.5	2	1.5	0.04	灰白色	穿孔方向上から
15-21	S X 01 北西区	凝灰岩 白玉	4	4	2	0.05	灰白色	
15-22	S X 01 北西区	凝灰岩 白玉	4.5	2.5	1.5	0.06	灰白色	穿孔方向下から
15-23	S X 01 北東区3層	凝灰岩 白玉	4.5	2	1.5	0.04	灰白色	穿孔方向上から
15-24	S X 01 北東区3層	凝灰岩 白玉	4	2.5	1.5	0.03	灰白色	
15-25	S X 01 北東区3層	凝灰岩 白玉	4.5	3	1.5	0.07	灰色	穿孔方向上から
15-26	S X 01 北東区3層	凝灰岩 白玉	4	2	1.5	0.04	灰白色	
15-27	S X 01 北東区3層	凝灰岩 白玉	4	2	1.5	0.03	灰白色	
15-28	S X 01 北東区2層	凝灰岩 白玉	4	3	2	0.04	灰白色	穿孔方向上から
15-29	S X 01 北東区石榴外	凝灰岩 白玉	4.5	2.5	1	0.05	灰白色	穿孔方向上から
15-30	S X 01 北東区石榴外	凝灰岩 白玉	4	3.5	1.5	0.06	灰白色	
15-31	S X 01 北東区石榴外	凝灰岩 白玉	4	1.5	1.5	0.03	灰白色	穿孔方向上から
15-32	S X 01 北東区石榴外	凝灰岩 白玉	4	2	1.5	0.03	灰白色	
15-33	S X 01 北東区石榴外	凝灰岩 白玉	4.5	2	1.5	0.04	灰色	穿孔方向下から
15-34	S X 01 北西区石榴外	凝灰岩 白玉	4	2	1.5	0.06	灰色	穿孔方向上から

持団番号	出土地点	材質 器種	直径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
15-35	S X 0 1 北東区右横外	凝灰岩 白玉	4	2~2.5	1.5	0.05	灰白色	穿孔方向上から
15-36	S X 0 1 北東区3層床下	凝灰岩 白玉	4.5	2	1.5	0.04	灰色	穿孔方向上から
15-37	S X 0 1 北東区3層床下	凝灰岩 白玉	4	2~2.5	1.5	0.05	灰白色	穿孔方向上から
15-38	S X 0 1 北東区3層床下	凝灰岩 白玉	4	2~3	1.5~2	0.05	灰白色	
15-39	S X 0 1 北東区3層床下	凝灰岩 白玉	4	2	1.5	0.05	灰白色	
15-40	S X 0 1 北東区3層床下	凝灰岩 白玉	3.5	3	1.5	0.04	灰白色	
15-41	S X 0 1 北東区3層床下	凝灰岩 白玉	4	2	1.5	0.04	灰白色	穿孔方向上から
15-42	S X 0 1 北東区3層	凝灰岩 白玉	4	2	1.5	0.02	灰白色	
15-43	S X 0 1 北東区右横外	凝灰岩 白玉	4	3	2	0.04	灰白色	
15-44	S X 0 1 北東区右横外	凝灰岩 白玉	5	2.5	2	0.05	灰白色	
15-45	S X 0 1 北東区右横外	凝灰岩 白玉	4	2.5	1.5	0.05	灰白色	
15-46	S X 0 1 北東区右横外	凝灰岩 白玉	5	2~2.5	2	0.06	灰白色	
15-47	S X 0 1 北東区右横外	凝灰岩 白玉	3.5~4	2~2.5	2	0.03	灰白色	
15-48	S X 0 1 北東区右横外	凝灰岩 白玉	4	3.5	1.5	0.05	灰白色	
15-49	S X 0 1 北東区右横外	凝灰岩 白玉	4.5	2	2	0.03	灰白色	
15-50	S X 0 1 北西区	凝灰岩 白玉	4.5	2~2.5	1.5	0.05	灰色	穿孔方向上から
15-51	S X 0 1 南東区	凝灰岩 白玉	4.5	1~2	1	0.05	灰色	
15-52	S X 0 1 北東区9層	凝灰岩 白玉	4.5	1.5	2	0.03	灰白色	
15-53	S X 0 1 北東区9層	凝灰岩 白玉	4.5	2.5~3	1.5	0.06	灰白色	
15-54	S X 0 1 北東区3~4層	凝灰岩 白玉	3.5	2.5	1.5	0.03	灰白色	
15-55	S X 0 1 北東区3~4層	凝灰岩 白玉	4.5	2	1.5	0.05	灰色	
15-56	S X 0 1 北東区3~4層	凝灰岩 白玉	4.5	2.5	2	0.05	灰白色	
15-57	S X 0 1 北東区3層	凝灰岩 白玉	4	2~2.5	2	0.03	灰白色	
15-58	S X 0 1 北東区3層	凝灰岩 白玉	4	2.5	2	0.03	灰白色	穿孔方向上から
15-59	S X 0 1 北東区3層	凝灰岩 白玉	5	1.5~2	1.5	0.06	灰白色	
16-2	S X 0 1 北東区	ガラス 工	①6 ②4	①2 ②2			スカイブルー	鉄製品に付着

## その他観察表

検査番号	出土地点	材質 器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
9-1	7区	鉄 斧	10.8	4.4~5.2	3.4	380	袋状鋸刃 袋内部はドロが鉛化して結まっている
9-2	9区 4層 (周溝内)	鉄 U字状鍔 (鈕)先	12.5	14.8	0.4~0.8		鍔片4点からの復元 断面Y字状
9-3	9区 4層 (周溝内)	鉄 鎚?	4	3	0.3		湾曲した内側が刃部
9-4	13区	鉄 釘3本分	釘1 5.4 釘2 3.6 釘3 3.3	釘1 0.8 釘2 0.7 釘3 0.5	釘1 0.5 釘2 0.2 釘3 0.3		釘1 角柱状 釘2 半べったく潰れている 釘3 角柱状
9-5	13区	鉄 釘	2.3	0.5~0.8	0.7		角錐状
9-6	14区	鉄 器種不明	7.5	1~1.4	0.4~0.5		闇の痕跡あり 釘状のものが数本付着
9-7	7区	鉄 釘2本分	大 6.3 小 2.3	大 0.8 小 0.5			
16-1	S X 0 1 北東区 北東区石橋外 北東・南東区石 橋取り上げ中	鉄 劍	全體 13.7 刃部 6 柄 7.7	刃部 2.6~ 2.9 妻部 1.6~ 2.1	刃部 0.7 妻部 0.2 ~0.3		奥は丸みを帯びて不明瞭 茎は尻に向かって直線的に細くなる
16-2	S X 0 1 北東区	鉄 器種不明	1.7	0.9	0.4		ガラス玉2点付着
16-3	S X 0 1 北西区	青銅 鏡	2.4	1	0.2~0.3	0.95	小型彷彿鏡
16-4	S X 0 2 上位表土中	青銅 鏡	1.8	1	0.1~0.2	0.69	小型彷彿鏡 外区に銘文 青銅の間に入り込んだ石片は研磨され光沢あり

# 図版



主体部（上空より）



石室及びトレンチ調査完了状況  
(上空より)



完掘状況（上空より）

図版 2



S X 0 2 検出状況



S X 0 1 検出状況



S X 0 1 D-D' 土層断面  
(D'側)

S X 0 1 D-D' 土層断面  
(D'側)



S X 0 1 D-D' 土層断面  
(D側)



S X 0 1 A-A' 土層断面  
(A'側)



図版 4



S X 0 1 A-A' 土層断面  
(A側)



S X 0 1 遺物出土状況 1  
(小型仿製鏡片・ガラス玉)



S X 0 1 遺物出土状況 2  
(小型仿製鏡片・ガラス玉)



S X 0 1 遺物出土状況 3  
(鉄器・ガラス玉)



S X 0 1 遺物出土状況 4  
(3 の拡大)



S X 0 1 遺物出土状況 5  
(ガラス玉)

図版 6



池田古墳上空より南西を望む



池田古墳より大井谷を望む



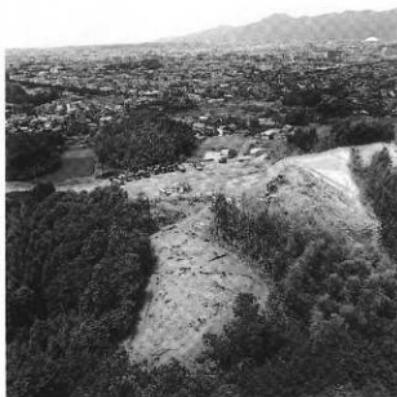
大井谷より池田古墳丘陵  
を望む



池田古墳上空より南東を望む



北上空より池田古墳を望む



南上空より池田古墳を望む

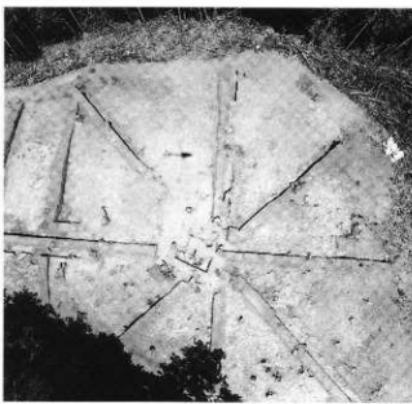
図版8



完掘状況（周溝付近より墳丘を見上げる）



完掘状況（北より墳丘を見上げる）



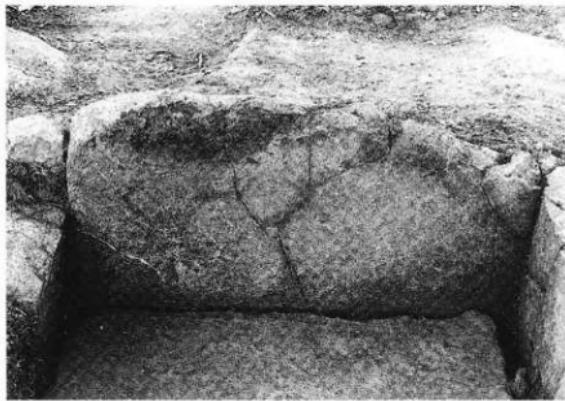
主体部（上空より）



主体部（南東より）



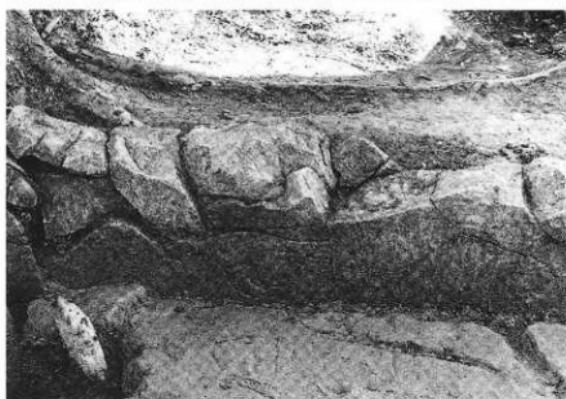
S X O 1 半断面状況



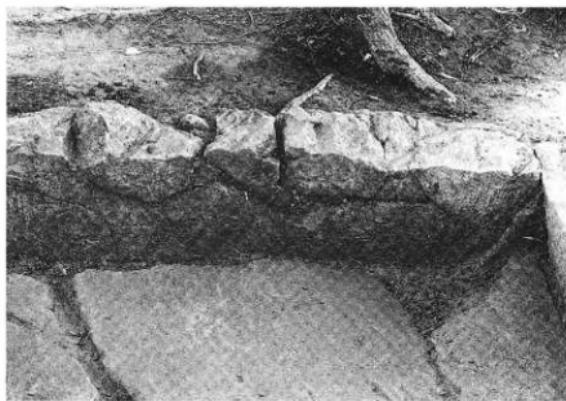
南東小口石（ノミ痕）



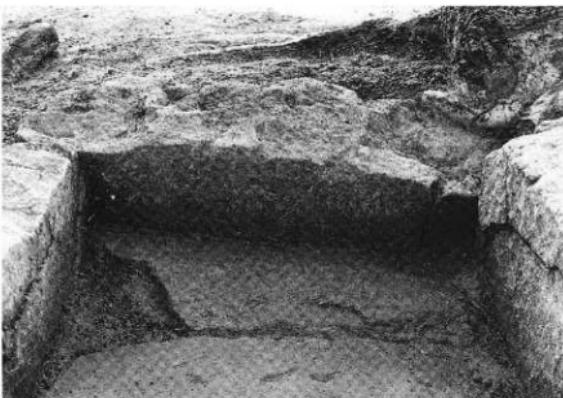
南西側石東側（ノミ痕）



南西側石中央（ノミ痕）



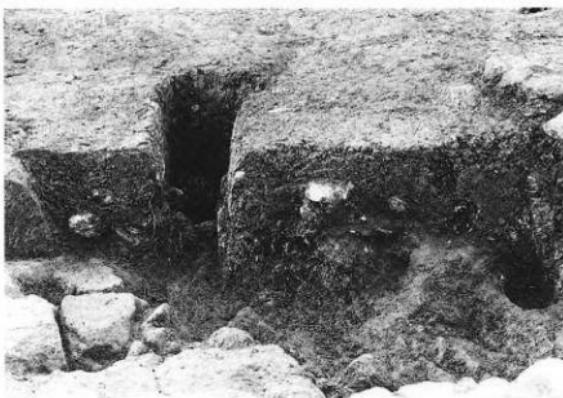
南西側石西側（ノミ痕）



北西小口石（ノミ痕）



北東側石西側（ノミ痕）



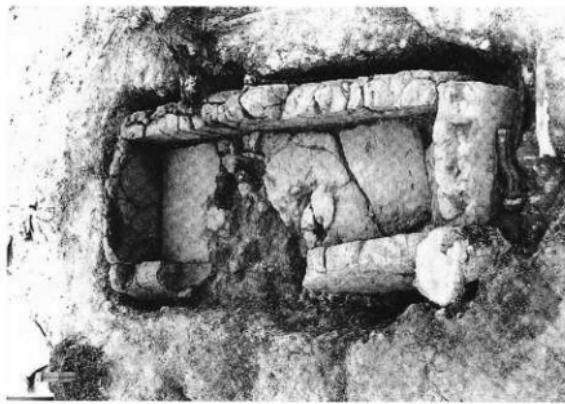
北東側石中央（欠損部分）



北東側石東側（欠損部分・  
ノミ痕）

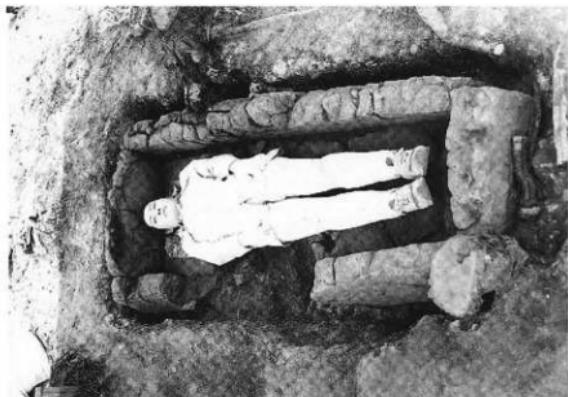


箱式石棺完掘状況 1



箱式石棺完掘状況 2

箱式石棺埋葬状况



S X 0 1 完掘状况



S X 0 1 · S X 0 2 完掘状况

